

---

Proving Ground    ~ 喪失と融合の世界 ~

時雨 彰弘

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Providing Ground      〈喪失と融合の世界〉

### 【Nコード】

N5096Q

### 【作者名】

時雨 彰弘

### 【あらすじ】

一見すれば平和な世界。そこに魔獣というイレギュラーな存在が異常に発生することで仮初めの平和は崩壊する。

原因を調べるためにレヴァの街に学生として訪れたセラとその街の長と言える存在の娘、ミルフィリア。二人が会ったとき、物語は始まった。

なんだかんだでシリアス気味の真面目路線を行ってほしい作品。処女作品、かつ無駄に不定期。推敲せざにとりあえず投下。ひとま

ず放置しますが、もしかしたら突如一から書き直すかもしれません  
(え)

## 第1話「終わりの始まり」

焼き野原となった場所に、一人の青年と一人の少年が居た。

「何故、ここに来た？」

18歳前後であろう青年が問う。その青年は年相応の軽量級の鎧に身を包み、左腰に差してある剣の柄に左手を置きながら少年に問う。

「今更表向きの理由なんていらないだろ。貴方を止める。そのために俺はここにいる」

12歳前後であろう少年がその問いに答え、少年の背丈には不釣り合いな大きさの刀を鞘から抜き、構える。その刀は大人が扱えば普通の刀になるのであるが、少年はまだ成長期前なのかまだ150cm程度の小柄な体。長剣にも見えなくもない。

「ふむ。さつきまで戦い続け、そしてまた戦うのか、おまえは？」

青年が訝しむように少年を見て言葉を出す。それもそのはず、青年が戦闘前の状態だとすれば、少年の姿は戦場を駆けつけた後のように血に汚れている。鎧も半壊、全身傷だらけ。それでも少年の目から闘志は消えていないのがよく分かる。

「貴方が、貴方がこんな馬鹿げたことをしなければ！ それならこんな事にはならなかったはずだ！」

少年は心の底から吐き出すようにして青年に向かって声を出す。

「何を馬鹿なことを。おまえが居たから俺がこのようなことをしたのだ。全てはおまえの責任だ」

青年は少年の言葉に対して何もなかったかのように淡々と話す。

「だが、もういい。この世界も、もう飽きた。俺はこれから他の世界に行こうと思う。おまえは俺を止めるとか言っても、これ以上追いかけてくる根性はないだろう？おまえはそこで無力を呪っていいばい。」

青年が剣を抜き、構えた瞬間、二人の姿は消えていた。否、視認

出来ないほどの速さで戦闘を開始したのだ。

実際、剣と刀がぶつかり合う音が辺りに反響している。

「そこまでして、俺より優秀と認められたいのか!？」

何合か打ち合った後、鏢迫り合いになり、少年が青年に向かって叫んでいた。

「当然だ！俺はそのために生まれ、生きてきた。それを貴様が全て壊した！俺の努力も何もかも！」

青年もここに来て叫ぶ。年の差はあれど、実力は拮抗しているらしく、鏢迫り合いから距離を取り直すことさえお互いにつく隙もなかった。

「だったら、なおのこと、こんな手段はやるべきではないはずなんだ！」

それでも少年は叫ぶ。

「貴様に何が分かると言うんだ！そんなに使命が大事なら、俺を倒してみればいいだろう！その全身に付けた血の跡のように、蹂躪してみせる！」

青年が加速し、少年に向かう。

「加速術式ならば、こちらもだっ！」

少年も加速し、青年に向かって行く。

「貴様を倒す！」

「貴方を止める！」

そして 半径2kmを焼け野原と化す原因となった、魔法も併用する大規模戦闘が、たった二人によって引き起こされることとなったのだった。

## 第2話「入学式」

俺は今、レヴァという街の学園にいる。と、いうのも俺が学生という役割を持つ年齢だからであるが。何でこんな事をしているのだろう、とか思っても、学生の年齢だからということだけで全て片付ける。そして、その学園で今、入学試験兼入学式を行っているのだ。

「受験番号404番、呆けていないでさっさと攻撃してこい」

見るからにごつごつした重量級の鎧に身を包んだ大柄な男が俺に向かって言葉を掛けてくる。ちなみに、受験番号404番は俺のことを示し、大柄な男が試験官。非常に分かりやすくていい。ここまでの状況だけで察しているとは思うが、俺は受験者だ。現在地はアリーナの舞台。試験内容は、魔法を用いた実技、いわゆる闘技と呼ばれるもの。そう、この世界には魔法という摩訶不思議現象がある。その意味では俗に言われる剣と魔法の世界とも言つべきなのだろうか？

そういえば受験番号が悪い気がする。これって一部の人から見たら落ちるような不吉な数字じゃないのだろうか。見つからない数字で有名だし。……まあ、どうでもいいか。そんなことより試験だ、試験。

「攻撃しても、怪我とかはしないですよね？」

くだらないことを考えながらも一応確認はする。怪我なんかされたらお話にならない。

「ふん、入学希望者相手に怪我などはほとんどしないが、万が一は考慮している。ここは《イメージエリア仮想空間》なのだ。つまり心配はせんでいいから、さっさとかかってこい」

《イメージエリア仮想空間》というのは、現実<sup>イメージエリア</sup>に体をおいて精神だけフィードバックする空間、ではない。現実の体ごと魔法で形成された空間に入ること、精神体に強制変換する空間を示す。つまり、ここで受けたダメージでは怪我はしない。だが、精神体になると言うこともあ

り、精神的なダメージはあり得るのだ。

「ついで、というのも語弊がありますけど、別に攻撃は詠唱魔法でなくてもいいですよ？」

魔法は三種類に分類される。簡単に言えば、詠唱をして発動させる『詠唱魔法』、魔法陣を介して発動する『術陣魔法』、最後にただ単純に魔力を放出するという行為でそれは特に名称がないが俺はあえて『魔力放出』と呼んでいる……そのままだが、分かればいいんだ、分かれば。基本的に魔法と言えば、前二つを示しており、最後の一つはもはや魔法にすら分類されていない場合が多い。実際、気合いの方がしっくりくるほどだから仕方ないが。もつとも、それに分類しないのは魔力放出だけで何らかの特殊効果を付与することが出来るからだ。そのあたりについて今は割愛させてもらう。

「別に術陣魔法でも、腰に差してある剣と銃による武器による攻撃でもなんでもいい。攻撃せんことにはこちらも採点できない」

この試験は試験官相手に如何にして攻撃を当てるかで採点される。これは時間ではなく、手数で採点されるらしい。つまり、効率よく攻撃できるかをみたいということだ。

「では、これでいいですね？ それとこれは刀で、剣じゃないです」俺は懐から札を数枚取り出し、前に出す。ちゃっかり試験官の間違いを直すことも忘れない。俺の左腰に差してあるのは剣ではなく刀なのだから。

「どこが違うのか全く分からんが、早くやれ。魔法陣使いなら発動までに時間があるのだろう？」

試験官が最後に言った言葉、それこそが理由でこの試験は時間採点ではないのだ。術陣魔法に必要な魔法陣は描くまでに時間が必要なから。だが、俺には関係がない。

「魔法陣は、いりません。僕が使うのは符術ですから」

俺は喋りながら、手に持った札を試験官の方に向かって飛ばす。薄い紙がまっすぐ飛んでいくのは不自然なことだと考えてしまいが、札にはそのための魔法も併せて掛けてあるのだ。これも一種の常識

なのだから横槍は不要である。

「符術？ これはまた珍しいな。」

「そうなんですか？ 僕はそこまで珍しいとは思ってませんでしたけど。」

その間に数枚の札が試験官周りを囲うように飛んで回り始める。

「ふむ…… 我の前に立ちふさがる脅威、我はここに防ぐと願わん。

《障壁》<sup>シールド</sup>！」

試験官が念のために基本的な防御魔法である《障壁》<sup>シールド</sup>を周囲に張ったのを確認したので俺は起爆準備に入る。詠唱を完全破棄してないとはいえ、そこまで強固なものではなさそうだった。

「わざわざ防御魔法を使わせたのだ。それなりに威力はあるのだからっ？」

試験官が俺を試すかのように言ってくる。

「そうですね。では、いきます！」

俺は右手を前に出し、指を鳴らした。それが、合図となった。

「こ、これは……！！！」

試験官の驚愕と共に、札が一斉に爆発を起こす。付近一帯の空気が振動する衝撃と爆音が響いた。それに合わせて、俺はわざとらしく耳を塞ぐ動作をした。

「あー、やっぱり一枚で良かったか？ 威力高過ぎるだろ、これ」

「そんなことはない。なかなかおもしろい奴だな、おまえは」

威力を見た俺が独り言を言うと、試験官が相槌を打つように答えてくる。爆発後の煙が晴れて姿を確認する限り、怪我などは一切していないようだった。弱そうに見えた《障壁》<sup>シールド</sup>も全て壊れたわけではなかったようである。

「あれ？ 無傷ですか？」

「当然だ。だが、《障壁》<sup>シールド</sup>なしではさすがに危なかったかもしれない」

男はそう言っただけだが、若干足下がふらついている。どうやら魔力をかなり使ったようだった。再展開を咄嗟にした可能性も否定できない。そうになると、考えられるのは俺が威力調整に失敗したら



しいということか。まったく、どこまで威力を削げばいいんだよ。

「必要なら、余力もあるので続けますけど？」

一応、形式だけでも手札があることにしておかないと、手を抜きすぎて不合格とかになりたくない。

「その必要はない。符術使いならばここ以外で面倒を見られるわけがない。むしろ、最初からそれを連射されれば打つ手もなかったのだからな。受験番号404番、レヴァにある特級学園への入学を許可する。」

俺はその言葉を理解できた。すなわち、合格ということである。

「ありがとうございます！」

「ふん、その刀とやらを使いこなす努力もするようにな。受験番号404番、セラ・グレイヴス」

その言葉と同時に、俺は仮想空間を出て行く感覚を味わったのだ。この感覚は、なんとというか、なれないと気持ちが悪い。

それにしても、刀とやらを使いこなす、ね。ひどい扱いだ、予定通りにいけそうだ。

\*\*\*

「……で、あるからして……」

眠い、とは言わない。が、暇ではある。

あの試験の後、入学式開始時刻が昼過ぎであることを伝えられ、開始時刻まで街をのんびりと見物したりしていた。試験開始が朝からだったのに昼から入学式というのは、試験が行き先面接的な意味も含んでいる事を考えれば、まだ分かる。

そもそもあの試験は選別試験であって、正確には合否はなく、通う学園の行き先を決めるものだったりするのだ。試験は二種類、実技重視型と知識重視型。どちらかを選択してその結果で行き先が決められる、というシステムである。これは志願者が志望するのにも関わらず学園に通えないと言う問題を解決するために作られた。だ

が、これは表向きであつて、才能ある者は主要地区の大きい学園に、そうでない者は遠くに行かされるといふのが現状であり、問題解決にもなっていない。これは入学時だけではなく、今後も定期的に試験をやつて通う学園のレベルを変更されることがある、と言つことも示す。要はクラス替え試験のようなものと考えればいいだろう。

「……君たちはこの特級学園に入学できて……しかし、これは……」  
現在、入学式につき、もはや聞く気も起こらない校長の長話が現在も続いている。あまりにも暇なもので、自分で無駄な思考でもしないと本当に暇で死にそうになつてくるのだ。さて、さつきまで何を考えていたか、ああそうだ。学園のシステムがクラス替えみたいなものだつてことだつたな。

学園はこの世界の主要三力所のそれぞれの街に最大級のものである。それを特級学園と呼び、学園に入る者は皆、ここに入りたがる。そこからランク順に第一級、第二級と第十級まであり、最後に出てくるのが第零級である。ランクが下がる事に物理的に特級から離れていくというシステムがあるのがこれだ。ちなみに、第零級に関しては第十級でも落ちこぼれた生徒に与えられる最後の関門であり、そこに入れられた場合は大抵退学処分される。とはいえ、自主的に学園に入りたがる生徒がそこまで馬鹿げたことになるわけがないため、強制退学などというひどいことはそうそうない。だから、基本的には十一種類の学園が在ると言つて良いだろう。

「……ここで学ぶということは……自覚ある、学園生活を……」

とはいえ、悠々と学園生活を送るためにはこのシステムを理解し、落ちないようにする必要がある。校長の長い話はそれを説明しているのだ、たぶん。入るときはどちらか一つを重視できたが、入学後はそうはいかない。実力がない者は落ちるといふ弱肉強食の世界なのだから長い話としたくなる気持ちも分かるけれども。

そうそう、特級がある三力所の街にはある共通点がある。それは、この世界の実質的な頂点に立っている“資産家”という家が存在していることだ。実はこれが特級を目指したがる理由だったりする。

つまり、この学園の卒業時のランクによっては資産家と近づくチャンスも出来るということであるから、出世の大チャンスなのだ。

俺はといえば、別にそんなことに興味はなくて、ここに来たのはもののついでだったりする。少なくとも、学園にも行かずこの街で生活していたら俺はこの街に入れなくなりかねない。

「……この世界は平和である。けれど、それは支える者があってこそ……」

……本当に長いな、この話。暇だし、どうやらこの世界の成り立ちでも話しているようだから、それについて少しは考えてみるか。

この世界は平和だ。それは街を外敵から守る城壁や、高度な治安のおかげだろう。外敵には主に魔獣と呼ばれる謎の生物っぽい何かが挙げられる。ちなみに、魔獣に対してそんな認識で世間を通れるわけではなく、獣らしい魔物、とでも考えてもらえばいい。と、そんな奴らを駆逐していくのは主にギルドだ。治安維持は街を守る守兵隊の仕事、魔獣退治などの戦闘はギルドに任せればいいという役割分担だと世間は言う。その風潮のせいかな、この学園卒業者はギルドに行く者も多い。

だが、当然ながら、ギルドに所属したからといっても魔獣と互角以上に戦える訳ではない。それなら赤ん坊でもギルドに入れればいいことになってしまふ。当然、時には傷つけられるし、最悪の場合、死ぬことだってある。そのためにはまず強くなければならない。だから、この学園では、自衛の手段も含めて、相当のレベルの戦闘をしていくこととなる。そのための魔法をもちいた実技試験、闘技を行っているのである。実際のところ、知識重視型は受験者が500人ほどしかおらず、内の10人ぐらいしか特級にいけない。戦闘重視型が特級一学年約160名の内、150人を占めているのが事実なのだ。よく考えれば、馬鹿が多いのかもしれないのが実情だ。

……ともかく、今日の朝の試験は知識重視型にとつての特級と第一級の境界判別試験だったということになる。ちなみに、俺は知識重視型だ。こんなところで自分の手札を切ったまるか、という死活

問題の上での決定。

「……では、君たちの成長に期待する。以上だ。」

と、やっと終わったか。長い話だったことで。

「では、各自、会場に入ったときに渡された白いカードに各々の魔力を通してください。」

入れ替わりに司会係が入学式会場に入る時に渡してきた白いカードに魔力を通すように言ってくる。俺は指示通り、魔力をカードに魔力を通した。

すると、カードの色が変わった。単純に、白いカードが黒いカードに変わっていた。なんだこれ？ 行き先を書いてあるわけではないのか？

「カードの色の变化したクラスに向かつてもらいます。それがあなた方のクラス分けとなります。その色のプラカードのところに並んでください。」

どうやら、クラス替えのためのカードだったらしい。色にどういう意味があるのか全く分からなかったが、とりあえず、黒いカードのクラスに向かうことにした。

「あら？ 貴方も黒カード？」

呼びかけられて、ふと立ち止まる。声があつた方を見れば、容姿端麗の少女がそこにいた。遠目から見ただけでもわかるメリハリの利いた体つき、と言えばいいだろうか？

加えて言えば、彼女の容姿は髪と眼が青色であることから、宝石で言えば蒼きサファイアのような輝きを持った少女であり、その雰囲気には他者を飲み込む気品があつた。

決して他者を受け入れないという風ではないが、他者と一線を隔てることで纏う輝きがさらに強くなっている感じすらする。

「あ、ああ。そうだ。『貴方も』と言うことは君も黒なんだな」

一瞬でもその美貌に見とれてしまったことに若干の恥ずかしさを覚えながら、俺は少女に答える。ああ、俺もまだまだ甘いかな。色恋沙汰にうつつ抜かしている場合じゃないというのに。

「ええ。私はミルフィリア・レムクラン、以後よろしくお願いしますね」

少女が貴族の挨拶として、スカート裾を少しつまみ上げてお辞儀をしてくる。……って、ちよつと待て！”レムクラン”だと!?

「これは大変失礼な真似をしてしまい申し訳ありません。レムクランの御令嬢とはいざ知らずとんだ粗相を。私はセラ・ヴレイヴスと申します」

瞬時に意味を悟った俺はすぐにその場に膝をつき頭を垂れる。正直なところ、いきなり資産家と接触するとは思っていなかった。

「そう、セラ・ヴレイヴスというの。貴方、面白いわね」

彼女が心底つまらなさそうに言い放つ。その声色は、期待はずれだったということか。俺だってこんなことをする意味はないと思うが、だからといって目立つようなことはしたくない。

「申し訳ありません」

凄く美人に対してこんなことする俺って、もはや従者扱いだと思う。周りはこの光景を見て野次馬状態になって静かになってるし、誰か助けてくれとは少々思う。

「まあ、いいわ。とりあえず、集合場所に行きましょう」

靴音を立てて歩きだす彼女。俺はそれを確認した後、ゆっくりと立ち上がり、彼女と同じ方向へ向かう。それから、教室に着くまで彼女は俺の方を一切見ようとはしなかった。

これが、俺、セラ・ヴレイヴスにとって、特級学園での生活の始まりだったことを後にひどく後悔しそうになるなど、まだ知る由もない。

### 第3話「初日という日の出来事」

あれから教員の指示によって移動し、教室に着いて、40名程度のクラスで一般的な自己紹介もした。

彼女、ミルフィリア・レムクランの自己紹介の時、全体が騒いだのも事実だ。男はその美貌に見とれ、女は妬みの視線すら向けていた。

「では、皆さん、明日からこの学園で生活してもらおうわけですが、今日は各自寮または家の場所を登録してもらいます。既に決定していると思いますので、今から配る紙に場所を書いて提出してください」

担任の女教師が仕切る。名前は……駄目だ、覚えてない。聞いていたかも定かでない。それほどまでに俺はレムクラン嬢から来る殺気が気になって仕方なかった。

「書き上げた人から順に帰ってもらって結構ですよ。」

女教師がにっこりと微笑む。だが、俺はある事実気付く。

何を隠そう、俺は宿に寝泊まりしている身で、寮など決めていないのだ。

ただでさえ知識重視型は特級に入りづらいののに、そんな手続きは普通しない。だからこそ、俺も何もしなかったのだ。だが、それが裏目に出ていることも事実。

「あとは、えーっと、名簿名簿……セラ・ヴレイヴス君、教壇に来てくれない？」

寮をどうするか考えていたら、突然名指しで呼び出された。一体俺が何をした？

「はい、何でしょうか？」

周りから奇異の目で見られながらも、俺は席から立ち上がり教壇に向かう。

「実は、貴方しか今年には知識重視型で特級に来た人が居ないの。だ

から、貴方は普通の寮ではなくて、別の場所に行ってもらうことになるのよ。」

俺だけ知識重視型、と言う部分でどよめきが起こる。なんなんだ、こいつら。

「それでは、僕はどうすれば良いのですか？」

「ええ、それがね、実は……学園からの寮の案内は一切ないので自分で何とかするように、とのことですよ」

「……は？」

俺はあまりのことに呆然とする。寮の案内がされない？ それはつまり、俺に学園から出て行けと？

別にこの学園は特級ならば学費は無料、寮に関してのみは自費となるが、破格の値段で寮に住み込みが出来るのだ。学園の成績によつては移籍の可能性があるので、家族などはこの寮に関しては一切関係しない。

「知識重視型の特別寮、実は取り壊しが決定したらしいの。残りの寮は満室ですし、貴方一人のために学園もそこまでできませんし」

「ちょっと待ってください！ それなら僕を実技重視型と同じ寮に手配してくれればいいじゃないですか！？」

さすがに俺もそこまで馬鹿じゃない。別に寮がなくても有り金は尽きないだろうが、それでも普通の生徒と同じようにすべきなのがある。

「それがね……そっちも空きがもうないらしいの。申し訳ないけど、そちらでなんとかしてくれないかな？」

そんな理不尽な。とか思いつつ言葉を飲み込む。ここで文句を言つても仕方ないのだ。

「……わかりました。こちらで何とかしてみます。ですが、この書類はいかがすればよろしいですか？」

俺は先程配られた書類を指し、指示を仰ぐ。

「寮以外の事項を書いていただければ結構ですよ」

「わかりました」

俺はさっさと席に戻った。途端に、教室がうるさくなる。

「ねえ、あの人、すぐに辞めちゃいそうよね。」

「そうね。見た目は格好いいけど、知識重視型じゃきつと偏屈だろうから、別に良いけど。」

「あいつさつき、ミルフィリアさんと喋ってただろ?」

「ああ、でも見た感じ、馬鹿にされてた。あいつはきつとすぐここから落ちてくぜ?」

そんな感じの会話だった。聞いていて凄く気分が悪くなる。だが、そんな彼らも書類を提出し、さっさと出て行ってしまった。

俺はというと、あと数人になったところで書類を出しに行こうとしたら、同時にレムクラン嬢が立ち上がった。

あまり考えずに書類を出し、先に教室から出ると、外には人が溢れかえっていた。視線の先を見る限り、レムクラン嬢が目当てらしい。情報が回るのは早いと思いつつも、俺は人混みをかき分けて行く。すると、後ろから歓声と共に人混みが分かれて道を作っているのが分かった。

俺は面倒事が嫌いなので、さっさとその場を離れようとした。だが、それもできなかった。

「セラ、少し私に付き合いなさい」

俺が彼女に呼び止められたからだ。

「わかりました」

俺は仕方なく、と思いつつもそれを表に出さないようにして頭を下げる。

「付いてきて」

そう言って彼女は早歩きで歩きだす。俺は黙ってついて行くことにした。



「|||||

「なぜ、あんなことをしたのか全く分かってない感じね？」

「人气がなくなった頃になって、彼女が後ろに振り向いて、話掛け  
てくる。」

「お恥ずかしながら。私には欠片も想像できません。」

「とりあえず、その口調を止めてくれないかしら？ 堅苦しすぎて  
疲れるのよ。」

「当の本人は既に口調が柔らかい。仕方なく俺も口調を普通にする。  
」それで、俺をどうしたい？」

「そう、それがいいの。ふふっ、わたしはね、あなたの魔法に興味  
があるの。」

「どつという意味だ？」

「貴方、符術使いなんでしょう？ だから、今から私の家に来て模  
擬戦をしてくれないかしら？」

「断る。」

「俺は即却下した。模擬戦なんかで時間を消費するほど俺には余裕  
がないのだ。」

「貴方、資産家に対してその態度で良いの？」

「気が変わった。学園では俺の生活を支援してくれないようだ。な  
らば、明日以降の平穩を願って身の振り方を考えても仕方ないだろ  
う？」

「貴方、やっぱり面白くないわ。」

「その目が、思い通りにならないことを悔しく思っているのがわか  
り、この一連の流れがどうなっているのか分かってしまった。」

「勝手に言ってる。こうなった原因も今ので予想が付いた。おまえ、手回したな？」

「……何を言ってるのかしら？」

反応が明らかに遅い。やはり、凶星のようだった。

「ごまかすな。大方学園の上層部に圧力を掛けたというところか。だが、行動に移すのが早すぎる。もう少し慎重に行動すべきだ」

「なら、貴方の知恵を貸して！」

「……は？」

何を言ってるんだ、こいつ？全く訳が分からない。彼女が涙目でこちらに詰め寄ってくる。これならば、大抵の男は一発で墮とせるだろう。いや、そういう問題ではない。

「私は今、狙われてるの！ そのために符術の知識で危険を回避したいの！」

「馬鹿なこと言うな。それに資産家を狙うのも無いと言わないが、だからといってなんで符術なんだ？」

「婚約したくないから」

「は？」

驚愕、二回目。全く脈絡がない。正直に言う。意味が分からない。「私は好きな人と結婚したいの！ でも家のせいで私を道具としか見てない奴らがたくさんよって来る。資産家は強いものを受け入れるからこそ、私が強くなつて、私の未来を勝ち取りたいの！」

「……馬鹿がここにいる」

真剣な目を向けていた彼女を見て、俺は盛大なため息をつく。

「何言ってるの！」

彼女が顔を真っ赤にして怒り出す。それはそれで可愛いが、それどころではない。

「いや、どう考えても馬鹿だ。その理論だと俺が符術って一面では絶対的に強くなるだろ？ 符術の師匠ってだけで俺が婚約迫ったらどうするんだ？」

「あ……」

レムクラン嬢の顔がさらに赤くなっていく。本当に考えてなかったのか……

「それで、どうする？ 俺を捕まえても不利益があることは分かっただろ？」

「私は……」

「とりあえず、俺は帰る。これに腹を立てたからって俺を社会的に抹殺とか止めてくれよ？」

「え？ ちょっと！」

後ろで何か騒ぐ声が聞こえたが、俺はそれを無視して帰り始める。「人の話を聞きなさい！！」

後ろから突然後頭部目掛けて飛んできた鞆を自然に避ける。……

あ、やばい。ついうっかりやってしまった。

「なんで、なんで避けられたの？」

その言葉が届くと同時に飛んでいた鞆が地面に落ちる音がする。

「たまたまだろ？ 気にしない方が良い」

俺は頬を掻きながら、落ちた鞆を拾う。

「あなた、それで知識重視型の試験って、まさか……」

「気のせいだ。ほら、鞆。もう投げるなよ、危ないから」

俺は彼女に鞆を渡すとこの場から立ち去ろうとする。だが、手を握られたことでそれは出来なかった。

「お願い、学園に居る間で良いから私の護衛になって」

どうやら狙われていることだけは本当らしかった。だが、今日会ったばかりの見知らぬ男に護衛を頼むなどどうかしている。

「あのおな、普通に考える。いきなりそんなこと頼まない方がいい。その気があると勘違いされる。」

俺はレムクラン嬢に忠告しながら手を離させてやる。だが、きちんと意味が伝わらなかつたらしい。

「その気？ 何それ？」

「好意があると思われるって言ってるんだ。いきなり護衛なんて頼む時点でそいつと一緒に居ることになるんだぞ。好意かと思われて

も不思議じゃない。」

「え？」

「別に俺はその気が無いことはわかっているから、どうしようとか言わないが、発言にはもう少し気をつけるべきだ。」

「あの、それって……」

「おい、聞いてるのか？」

「貴方、私のこと好きなの？」

「人の話を聞けというわりに、自分は聞かないんだな」

俺は脱力する。怒る気もなくなっていたのだ。

「とにかく、私は狙われてるの、だから護衛して？」

「断る。俺はそんなに暇じゃないんだ。ここに来たのはあることをするために、学園生活を楽しむためじゃない」

「あること？」

「そう、あること。そのために俺は図書館で生活の大半を過ごしても良いんだよ」

「なにそれ、引きこもりみたいね。それじゃ彼女なんてできないわよ」

そして、レムクラン嬢は人を馬鹿にするようにして笑い始める。

「別にかまわないんだが。とにかく、護衛の件は断る。俺には戦闘力は皆無なんだから。」

「何言ってるの？ 符術があるんでしょ？」

「あれは試験に受かるために用意したものだ。使い物になるわけがない。」

「じゃあ、その刀は？」

「飾りだ」

「本当？ 見せてよ」

そう言っつて、彼女は俺から刀を奪い取る。

「おい、なに盗ってるんだよ！？」

「どれどれ……ちょっと、なんなのこれ？」

レムクラン嬢が刀を引き抜くとあまりにも鋭い刀身が露わになる。

それは普通の刀ではないことを一目で分からせた。

「危ないからしまえ。本当に危ないから」

「なんでこんな名刀を持つてるの？ 本当にこれ、飾り？ なんならこれ売ってくれたらこの街一番の宿で学園生活させてあげるわよ？」

「売る気もないから、返せ。それはお守りなんだよ」

「お守り、か……」

レムクラン嬢が刀をしまい、返してくる。受け取ったとき、俺はある気配を感じた。

「これは……」

「何？ どうしたの？」

「レムクラン嬢は魔獣に襲われたこと、あるか？」

「何その呼び方、まあ、いいわ。質問の答えとしては、あるわ。小さい頃に一度。もう見たくもない」

「そうか、なら逃げろ。今すぐ、早く！」

俺は気配のする方を向き、彼女の前に立つ。

「一体何が……え？」

おそらく彼女も見つけてしまったのだろう。

金色の眼を持つ、狼のような魔獣を。

#### 第4話「魔獣」

魔獣 それは、存在してはならないもの  
そのように定義された魔獣ではあるが、一目でそれが魔獣と判断する方法が一つだけある。目を見ればいいのだ。  
魔獣は皆、眼が金色であり、金色の眼を持つものは魔獣なのだ。

「ミルフィリア side」

「なんで、魔獣が、こんなところに……」

「そんなことはわからない。だが、どうする？ このままだと二人ともやられるぞ？」

今日知り合ったばかりのセラがそう言うってくる。だが、私は動くことが出来なかった。

「お母さんを、お母さんを殺した魔獣、いや、こないで、いやあ！」

「おい、どうした！ おい！」  
彼が私を呼ぶ声がするが、私は小さいころの光景を思い出していた。

そう、初めて魔獣を見たときにお母さんを食い殺した魔獣。あの時もこんな狼のような魔獣だった。

私が、泣き出して、街の外に飛び出したために魔獣に襲われ、お母さんは私を庇って死んでしまった。

私は食べられる直前で救出されたが、お母さんは骨すら残さず魔獣に食べられたのだ。

私の中で、その光景が何度も繰り返され、そのほかのことが何も分からなくなる。

しかし、私の頬に強い衝撃が走った。

「!？」

「死にたいのか! 死にたくないならここから逃げる!」

彼が私をはたいたのだろう。緊急事態だからこそ、彼を咎めることも出来ない。私は我に返って、現状を認識する。

「逃げるって言っても、すぐに追いつかれるわ!」

「とりあえず、俺が囷になるから、速く逃げる!」

一瞬彼が幼い頃に見た母に重なって見えた。

「駄目よ! 私のために命を捨てるなんて!」

「だが、それ以外に方法があるのか? 魔獣に対して二人で対抗しようと言うのがそもそも間違いだ。違うか?」

そう、それが問題だった。街中で突然魔獣が現れたのも問題ではあるが、それ以前に魔獣は熟練の傭兵十人がかりで下級一匹倒せると言われているほど強い。

目の前にいる魔獣は下級と言われているもの、こちらは二人そして、彼には戦闘経験などまるでなさそうな上、私も魔獣相手では足がすくんでしまっている。

「でも、貴方をおいてここで逃げるなんて!」

その瞬間、魔獣が咆哮をあげる。それは重低音よりももっと大きな、それでいて重圧的な音だった。

「魔法陣だと!？」

「何なの!？」

最初は彼が言った言葉が理解出来なかった。魔獣が魔法陣を使うなど聞いたこともなかったからだ。だが、現実が違う。目の前で魔獣が魔法陣を使っているのを見てしまった。

「ここを召喚場にする気か!？」

彼は魔獣がやろうとしていることが何なのか分かったらしい。私 が気付いたときには札を投げつけていた。札が魔獣に近づいたとき、彼が指を鳴らし、札が爆発し轟音を発する。

「発火符、なの?」

「ああ、試験でこいつを使った。威力はそれで分かったから、十枚

ほどまとめて使ったんだが、どうやら手応えなしだな。」

「何言って、そんな！」

彼が嘘を言ったわけではないと分かってしまった。魔獣が全くの無傷だったからだ。

「どうしようもないな、こうなると」

「発火符は後何枚あるの？」

「さっきので全部だ。そんな大量にいつも持ち歩くわけがない」

「そんな。そうだ、その刀貸して。私がそれで切るわ」

彼はさっきそれを飾りと言った。けれど私ならまだ扱えるはずなのだ。

「駄目だ。その前に君が死ぬ」

「やってみないとわからないわよ。それに、貴方の発火符を警戒してこちらを様子見してるし」

「無理なものは無理だ。見たところ君はまだ熟練傭兵一人分の實力があるか無いかくらいだろう？ ならば、無駄死ににしかならない。」

「なんで、そんなことが分かるのよ！」

そう、彼が言う通り、私の實力は熟練傭兵一人分程度。とてもじゃないが、魔獣に太刀打ちなど出来ない。

「分かるんだよ。分かる気が無くても、見たら予想できてしまう。だから、無理だったこともわかるんだ。」

「それでも、やらないよりはやってから後悔したい！ 私は誰かの犠牲の上に生きたくないの！」

もう、お母さんのように誰かを目の前で失いたくない。彼は私が巻き込んだも同然なのだ。

「逃げる、と言ったのに、手遅れになったじゃないか」

だが、彼は冷たい声を出し、諦めたような感情を吐いた。

「何言って……」

「空間を固定された。魔獣がもっと出てくるぞ。もう、逃げることにすら叶わない」





「刀を抜いたんだ、おとなしく滅せられればいい」

「たった一閃で三匹同時に消滅させたの？ そんな、下級とはいえ魔獣をそんなあっさり!?!」

「この刀は『光陰』という。俺の愛用の刀だ」

「今度は五匹、こちらに向かってくる。だが、所詮は雑魚。一刀のもとに切り伏せる。」

「飾りだつて言つてたじゃない!!」

「あんな、こんなことできる奴を学園が置いとくと思うか？ 普通に暗殺対象だぞ、俺」

「何言つてるの？ そんなことあるわけないじゃない」

「馬鹿言つな。俺が今葬つた魔獣が八匹。通常八十人で倒す量だ。」

「そんな奴が街中で暴れ出してみろ、手に負えるわけがない」

「まさか、そんなことが!」

「人間つてのは、あまりに強い者が近くにいと排除するように出てるんだよ」

そんなことを話してる間に八匹ほど周りを囲んでこちらに迫る。

「フィボナッチ数列じゃないんだから、変な規則性で襲ってくるなよ!」

かくいう俺は、走り回りながら魔獣がレムクラン嬢に飛びかかる前に全て切り裂いている。

「貴方のその剣技はどこぞ?」

「そんなのは後だ。さつさと残り切り伏せて、ここから出るぞ」

残りの魔獣は十弱。ならば一気に片付ける技を使えばよい。俺は技のために刀を鞘に収める。

「簡単に言わないでよ!」

レムクラン嬢がわめいているが気にしない。俺は技を使うタイミングを見ていた。その瞬間は意外に早く来た。

「殲滅陣」

技名と共に俺は突撃し、抜刀から順に魔獣群を陣を描くようにして攻撃していく。最後は描いた陣に納刀と同時に魔力を通して、跡

を残さないように抹消して完了。

「今の、何？」

「……面倒だから説明はパスだ。ここから出るぞ」

「あの、セラ？」

「何だ？」

俺は刀を構え、空間の壁を切り裂く。切り裂いた部分が次第に大きくなり、空間そのものが崩れていく。

「腰が抜けちゃったから、手、貸してもらえない？」

「馬鹿言うな」

「冗談じゃないの」

「本気か？ 俺が、おまえを運ぶのか？」

「うん、そうしてほしいなって」

「あー、レムクラン嬢その前に二つほど条件があるからそれを呑め」  
「条件？」

「一つ目、今のことは無闇に喋るな。むしろ誰にも言うな。二つ目、俺に頼ってもらくなことにならないと思うが、これ以上俺に関わるな。」

これは今後のためにも必要なことだ。もう誰も俺に関わらせるべきではない。

「うーん、一つ目はいいけど、二つ目はヤダ」

「何言っているのか分かってるんだろうな！？」

「分かってるわよ。貴方の近くにいたら守ってくれそうだってことが」

「分かってないだろ！？ 俺は誰かを守ることなんて出来ないぞ！」

「今、私を助けたのは貴方よ？」

「それは成り行きだろう！？」

「こいつ、ああいえばこう言ってくる。どつしると言うんだ？」

「それと、私のことは今後『ミル』と呼ぶこと、良いわね？」

「何言ってるんだ？ レムクラン嬢を愛称で呼ぶとかしたら俺が困

るだろう?」

「ミル」

レムクラン嬢が泣きそうな顔でこちらを見てくる。泣き落としと来たか。しかし、俺はその手には乗る気は無い。

「だから、俺は」

「ミル」

最後まで言わせてくれないどころか、むしろさっきより状況が悪化している風である。ああ、駄目だこれは。

「……わかった。ミル。今後はそう呼ばせていただきます」

先に俺が折れる羽目になった。完全に負ける羽目になるとは、ね。

「じゃあ、お姫様抱っこで連れてって」

「何故そうなる?」

「いいから早く」

「いや、待て、何故決定事項なんだよ」

「セラが私を愛称で呼ぶようになったから、記念に」

「どんな記念だ、ミル!」

「いいから、ね?」

ものすごく熱い視線をこちらに向けてくるミル。絶対にこれは折れないと判断出来た。

「……わかったよ」

愛称で呼ばせた超絶美少女をお姫様抱っこで連れて帰るという大変な事態に発展することになるとは思っていなかった俺が居た。

## 第4話「魔獣」(後書き)

連続投稿終了。

書き溜めとか一切せずに一日で勢い余って掻いてしまったのであまり出来は良くないと思いますがご勘弁を。

次回は書き溜めてから投稿したいと思います。

## 第5話「遊ぶ心」(前書き)

何してるんでしょうか、宣言に反するのが僕らしいですorz

何はともあれ、お楽しみいただけたら幸いです



私達、といえは語弊があるかもしれないから訂正すると、私を抱き上げているセラ・ヴレイヴスが一人で交戦した。

その後、セラに抱き上げてもらい、屋敷に連れて行ってもらうようにお願いして、その道中だったりする。

「ねえ、やっぱりさっきの魔獣、私を狙ってきていた気がするの」  
半ば確信を持ってセラに話す。人を襲ってくる魔獣を召喚できるのは魔獣か人間だけ。それでも、魔獣だけがいきなり街中に出てこないように魔獣の進入は一切ないように徹底している。

もし、いつの間にか魔獣が街に侵入しており、そこから魔獣を次々と召喚しても、その間の交戦が一切無いなどあり得ないことなのだ。

「さっきの魔獣は確かに誰かを襲ったりした痕跡はなかった。だからといってミルを狙ったものというのは短絡的すぎる」

魔獣は人を喰う度に体が大きくなっていく。先程の魔獣にはその変化はほとんど無いとされるほど、小さかったのだ。

「ねえ、やっぱり、護衛の件、頼まれてくれないかしら？」

私は自分の勘を信じていた。そして、目の前の彼 セラならば、それを何とか出来るのではないかということも、何故か確信できた。「言っただけで、俺にはやる必要があると。明日から俺はミルに時間を割くほど余裕はない」

しかし、セラは力強い意志の籠もった目をこちらに向けてくる。さすがに、これだけは譲ってくれないようだった。

「そう、そうよね。ごめんなさい、わがままだったことも、わかってたのに。この話を了承したら、今後ずっと巻き込んでしまっわよね」

少しだが、視界がぼやけてきたのが分かった。すると、頬を暖かい液体が伝っていく感覚があった。

これは、涙だろうか？ 私は今、泣いている？ なんて？

「代案というのもお粗末だが、護衛と言っても学内だけだったかならば信頼できる者の近くにいればいい。さすがに俺も視界に入



る知り合いの危険を眺めているほど酷くはないと思っている」

「セ、セラ？」

「護衛の件は断る。だが、俺の近くに居るな、と言った覚えはない」

「なんで、そんなこと……」

「ただの気分だ。だから、泣くな」

「セラは恥ずかしいのか、少し視線をずらして頬を赤くしている。」

「うん、ありがとう」

私は涙を手でぬぐい、セラを抱きしめる。なんで泣いてたんだろ  
う、私。

「そこまで動けるなら下ろすぞ？」

「家に着くまで少しぐらい胸貸してよ」

「……勝手にしろ」

セラがぶっきらぼうに言うと、静かに、ゆっくりと歩調を変えた  
のが分かった。

その温もりが、ただ気持ちよくて、ずっとそこにいたいと、そう  
思ってしまった。きっとその温もりが恋しかったから、私は泣  
いたのだと、そう思った。

だが、そんな私的に良い雰囲気も、大通りに出ると一変した。私  
はその喧噪で大通りに出たと分かったのだ。

「なんだあいつ？ 女の子を抱きあげてるぞ？」

「冷やかし。単にそれだけなら良かった。」

「おい、にーちゃん。その子もしかして資産家の子だったりする？  
髪も長くて蒼いし、そんな気がするんだけどね？」

絡んできたのがどうやらごろつきだったらしい。治安が良いと言  
っても、やはりこういう輩はどこにでもいるものなのだ。

「人違いですよ。彼女が疲れ切ってしまったらしいので僕が連れて  
帰ってるんです。」

私はセラの胸に顔を埋めてしまっているため、セラがどんな表情をしているのか、ごろつきがどれだけいるのか分からなかった。

「俺達はその役目変わってやるからよ、その娘おいて帰りな」

「そうそう、資産家の娘じゃなくても、俺達はかまわねえんだよ」

「なんで今日はこんなに面倒ばかりなんだろうな？」

場の状況に反して、セラは面倒そうな声を出す。確かに、あれだけの魔獣を一人で殲滅できる彼ならば面倒以外の何物でもないのだろう。

「無視してんじゃねえぞ!？」

「彼女に連れて行ってほしいと頼まれたのは僕だ。貴方達の出る幕じゃない」

セラが言い切る。それに、なんでかしら？ その言葉に凄く、どきどきする。

「あ？てめえはそいつの何だっけ言うんだよ？」

「さて、何でしょう？ 騎士ってことにでもしますか？」

最後に馬鹿にした笑いを付けたことで、セラが冗談のような声ということが分かった。それは分かっていたのだ。けれど、私を守る騎士なんて……

「馬鹿だな、騎士なんて言っても所詮一人だろ？ おとなしくやられちまいな！」

直後、地面に思い物がぶつかると大きな音が聞こえた。きっと、ごろつきが何か振り回したのだろう。

「すみませんが、僕の守るべき姫はわがままなので抱き上げたままじゃないと文句を言われるんですよ。そして僕は戦いを好みません、いいですね？」

セラが私を姫と言った。姫を守る騎士……ってこれは、年頃の子には麻薬よ!？」

「意味わかんねえこといつてんじゃ……」

「逃げられるなら、逃げますよ。特に今は。それじゃ、さよならです。『天飛翔』」

セラが何かの魔法を使った感覚がした。魔法発動時の魔力感知は私もいくらかは出来るのだ。

「ミル、もう顔を上げて良い。せっかくだから、見たらいい。」

「見る？それは……これ、綺麗ね」

視界に入ってきたのは、日が落ちていく様を空高くから見た風景だった。

「それにしてもセラ、詠唱破棄を見せつけるなんて、良いの？」

魔法には三種類あり、そのうちの詠唱魔法にはいろいろな段階がある。詠唱魔法の詠唱は術式を作り上げるために必要な過程であり、詠唱破棄とは詠唱抜きでその術式を作れる者がする行為である。ちなみに、その術式を発動させるトリガーが魔法名であり、熟練者はそれすらも破棄する。そのため、魔力をただ放出するのと区別が付かなくなってしまうこともあるのだ。詠唱破棄はその術を使い込めばそのうち出来るようになり、魔法効果自体は詠唱しているときとなんら違いは出ないということもある。

「別に、飛行魔法程度なら大した苦勞をしなくても詠唱破棄できるからな。そろそろ降りるぞ？」

「え、もうちょつと……」

「駄目だ、そんなに長時間飛ぶつもりはないんだ。さっきの奴らが追いかけてきたら騒ぎになりかねないんだぞ」

「じゃあ、また今度」

「機会があれば考えてやる。降りるぞ」

セラは急降下の後に急停止で着陸という飛行魔法で難しいとされる技術も難なくこなしてみせる。これは魔力操作が甘いと失敗し、大変危険な目に遭う。

「うー、もう少し躊躇したっていいじゃない」

「馬鹿言つな。俺はものついででやってんだぞ？」

「ついでのわりに騎士名乗ナイトってみたり、私を姫扱プリンセスいしたりしたじゃない……」

言いながらも、私の頬が熱くなっているのが分かった。もしかし

て、ううん。それこそ馬鹿な話よね。

「深い意味はないから気にするな。というかもうこの状態を止めた  
いんだが」

「駄目！」

「ったく、ミルを屋敷に連れて行くまでだからな？ 俺だって今日  
は宿の手配しないとイケないんだから」

「あ、そうだったわね」

我ながら自分で操作したことをすっかり忘れていた。

「誰のせいだよ、誰の」

セラがジト目でこちらを見てくる。

「それより、早く連れて帰ってくれないかしら、騎士<sup>ナイト</sup>さん？」

慌てて話題を変えようとする私。うん、悪いことをしたと今更な  
から自覚したわ。

「言ったな？ ならすぐにも着いてやる。」

「セラ、笑みが怖い。訂正するからゆっくりして？」

「断る。俺はさっさとミルを届ける」

「そんな、セラは私と居たくないのね……」

私は泣くようにしてセラに視線を向ける。これで落ちない男はい  
ないはずだ。

「この羞恥状態をなんとかしたら考えてやる！」

だが、予想に反してセラは無視して走り出した。それにしても、  
セラはこの街に来て数日しか経ってないはずなのに、どうして道の  
網羅をしているのだろうか？

こうして、私達はレム克蘭の屋敷前に着いて、冒頭の騒ぎを起  
こすことになった。

もともと資産家屋敷付近に近づこうとする人もそうはおらず、こ  
の辺りは静かなものなので多少騒いでも大丈夫だったりする。

「なんで俺がそこまでしないといけない!？」

「いいから、いいから。あ、アートン! こっちこっち!」

かなり良い体躯の執事であるアートンを門の向こうに見つけたのをこれ幸いと呼んでみる。

「おい、何呼んでんだよ! 俺はここまでなんだろ!？」

「ミルフィリア様、お呼びですか？」

アートンはセラを無視して、門を開けて出てくる。

「この人をあの件について関わってもらうから、丁重にもてなしてくれない？」

私はセラを指さしながらアートンに話す。

「あの件、って何なんだ? それに、俺は関わる気は無いと言ったはずだろ」

「このように申しておりますが、どうなのですか？」

「恥ずかしがり屋なのよ。今だっってこうして私を抱き上げてくれる人なんだけどね」

「なるほど。いい目をしていらっしやる、良き御方ですな。かしこまりました」

アートンの説得はこれで完了である。あとはお父様を説得すればいい。

「私は部屋に戻って着替えてくるから、彼は接客室に通して。セラ、もう下ろしてくれて良いわよ?」

私はこの状態を少々残念に思いながらも下ろしてもらおうようセラにお願いする。

「毒を食らうば皿までってか? やれやれ、本格的に資産家と接触する羽目になるとはね」

私を下ろしながらセラは若干嫌そうに言うが、顔を見ている限り、そこまで嫌がっているようには見えなかった。

「それじゃ、アートン、よろしくね」

「かしこまりました」

アートンがお辞儀するのを見た後、私は駆け足で自分の部屋に行く。

今度はセラと面と向かって喋るのだから、身だしなみを整えたい。そんなことを考えている自分を不思議と疑うこともなかった。

## 第5話「遊ぶ心」（後書き）

さすがにこれ以上は投稿しませんのであしからず。あ、さすがにこれは覆りませんからね！ 必死

次回更新は来週末を予定しております。気が向いたら早めに投稿するかもしれませんが、犠牲となる物も多いので、たぶん、そこまですぐはならないと思います。

ではこれからもよろしくお願ひします。

## 第6話「資産家」(前書き)

遅くなりました、第6話です。

……学園の設定が難しいと思う今日この頃ですorz



## 第6話「資産家」

よく考えれば、何故私はセラにここまでこだわっているのだろうか？

初めて見つけたとき、身長170後半の背が高めの金髪としか思っていないかった。振り向かせたときの顔は密かに見せてもらった資料で見たままの金髪碧眼。こんなのが符術使いだと思っていなかったのも多少はある。

私は自分の名を明かしたとき、一瞬でも何か番狂わせを期待したが、よりによって資産家当主に対する礼儀のような感じで私に挨拶してきたのだ。だから、私は面白くない、と思っていた。所詮、かかったら抵抗もせずに従う弱い者。必要なときだけ私に従う駒にしよう、そう思っていた。

資産家として、その彼を連れて行き、私は私自身の目的のために彼を使おうとした。言葉遣いも普通にさせ、暇つぶしの道具にしようとする。けれど、そうするためには、逆に彼が反抗するきつかけとなってしまうらしい。

その時は番狂わせが起こったことよりも、一切手の中に入らない、そんな屈辱が生まれていた。面白くない、と口から出たものの、実際には悔しかったのだ。

話をしている気付いたことは、私が彼を手懐けるなど不可能だと言ったことだった。それに、彼は隠している強さがあることが分かったのだ。だから、私は無理にでも私の護衛という名目で彼を縛ろうと考えた。でも、それすら無理だった。

魔獣と相対したとき、私は無理にでも逃げれば良かったのかも知れない。きつと彼は自分の戦う姿を見られなくなかっただろうから。

けれど、彼はこんな私に優しく微笑んでいた。そして、魔獣から私を守ってくれたのだ。

私にとつてのトラウマである魔獣の脅威から逃れて、私は腰を抜かしてしまったのもあるのだろう。立ち上がることすら満足に出来なかった。私は半分本気で彼に抱えるようにいたら、彼は渋々やってくれた。その腕の中が思ったよりも心地よかった。

私はそのあと結局この屋敷まで彼を連れてきて、彼にあの件の候補にあげようとしている。本当にそれで良いのだろうか？ 私は恩人である彼をこれ以上振り回して良いのかと考える。けれど、彼はきつと、あるかもしれない私の間違いを正してくれる。そんなことを考えてしまう。

一度は私の騎士を名乗ったのだから、それ相応は働いてもらおうと、そう思った。きつと私は卑怯だけれど、彼に惹かれつつあることだけは、なんとなく自覚出来てきた気がする。

||||||||  
||<セラside>

「遅い」

俺は一人接客室のソファで二時間ほど待たされていた。時刻はとうに夕方などというものを指していない。

そんな状態で俺は、今日の夕飯をどうするか真剣に悩んでいた。宿の食堂は間違いなく閉まっている。宿代金は今日一杯までは先払いしているので問題は無いが、かといって明日以降をどうするか考えていなかった。

「ごめん、セラ。遅くなっちゃった」

扉が開くと同時にミルの声が聞こえた。俺は嫌そうな顔をそちらに向ける。

「遅いとかいう問題じゃないだろ。それで？ 一体な、ん、の……」  
ミルを視界に納めたときには言葉が続けられなかった。

特徴的な蒼い長い髪と青い目、白い肌をさらに際立たせるような濃紺のドレスを身に纏っていたのだから。

それはもう、十人の男がいたら全員がその姿を脳裏に焼き付けそうなほど似合っていた。

「セラ？ どうしたの、固まって？」

ミルがきよんとする。

「ああ、すまない。完全に見惚れてた。それで、あの件ってのは何だ？」

俺の言葉にミルは一瞬顔を赤くしていたが、本題のことを思い出したのか、すぐに真面目な顔になる。

「えっと、その前に。ご飯にしない？」

何故真面目な顔してそういう話題に行く？ おかしくないか？

「いいのか？ そんなことしてて」

「いいの、それじゃ、行きましょ」

ミルは俺に近づいてきて俺の手を取り、引くようにして扉に向かう。もはや問答無用だな、これは。

「なんか、晚餐終わる頃にこの話に片が付いてそんな気がする」

俺が呟いたその小さな独り言はあながち外れていなかったことはもはや何も言わないでおこう。

「お父様、入ります」

扉をノックしていたミルに連れて来られたのは大きな扉のある部屋。現在、その前に居る。……ちよつと待て。いきなり当主と対面か？

「ミルフィリアか。入れ」

低い声が聞こえてくる。計画前倒しじゃないか、これ。その辺りは後で考えるか。

扉が開き、目に入ったのは予想通りの広い部屋。おそらく食堂か何かなのだろう。大きなテーブルの奥に一人の男が座っていた。

「君が候補者か。ふむ、思ったより貧弱そうだな」

見た感じの年は三十代半ば、と言ったところだろうか。思ったより若そうに見える。俺の記憶が正しければ実年齢は十年分ぐらいの差があるはずだが。

「実際に貧弱ですからそう見えて仕方ないですよ、当主。さて、そろそろその候補者とやらの説明はしてくるんだろうな、ミル？」

入ると速攻でけなされたようだが、軽くいなして近くの席に着き、ミルに振る。嫌な予感しかしない。

「えっと、その。セラ、私の婚約者候補になつてくれない？」

「却下する」

考えるよりも先に口から否定の言葉が出ていた。我ながら酷いと思うが、会つて一日で婚約者候補になつてたまるか。

「……だ、そうだが？ 何故、こんな輩を連れてきたのだ？」

当主が呆れた顔でこちらを見てくる。はっきり言つて、俺は被害者でしかない。

そんな俺を差し置いて、ミルが少しうつむいた後、何かを決めたように当主を見て、啖呵を切った。

「お父様の連れてくる婚約話にはこりこりなんです！」

「何を馬鹿なことを。我ら資産家の跡継ぎを得るためには必要不可

「欠なことだろう」

「あんな私の体と地位目当てで来る奴らは嫌だと、何度も言ったではありませんか！」

「何も考えず、言うことがそれか。彼らは名のある家の者達ばかりだ。そこにいる、どこの馬の骨とも分からん奴の方が良いと言っのか？」

「ええ。よっぽど良いわ。私との婚約を端から断ったのは彼ぐらいなものだもの」

「大体、おまえはそいつの何を知っているのだ？ アートンから聞いた限りでは学園で会ったばかりと言っではないか。」

「恋に時間は関係ありません！」

「私を馬鹿にしてるのか？」

……なんていうか、最初からずっと俺が馬鹿にされてる気がするぞ。そもそも、断ってる相手を候補に入れようって時点で間違いだとか何故突っ込まない？

「しておりません。しかし、この件に関しては一步も引く気はありません」

「ふむ。して、君はどうなのだ？」

「やっと俺にお鉢が回ってきたか。それにしてもこれ、どうやって収集付けようか？」

「くだらない親子喧嘩に付き合う義理もありませんし、そもそも婚約者候補などにもなる気はないです」

「前半部分についてっかかり本音が出てしまった。当然、わざとやっているのだが。」

「これが、くだらないだと？」  
当主が怒気をはらみ始めた。この人、頑固親父の性格そのままだな。

「くだらないですよ。娘が嫌がる婚約させて嬉しいんですか？ それに、資産家当主と親、今の貴方の立場はどちらなんですか？」

「資産家当主でもあり、親でもある。当たり前のことだろう」

「……駄目だ、思ったよりレムクラン当主は頭がお堅い。ミル、レムクランの家族構成は？」

「何だと!？」

「え、えーっと、お父様に、スノー家を訪ねに行つて今はいないお義母様、それに長女の私と、妹が一人よ」

「当主がなんか呻いているが気にしないで続けよう。」

「つまり次期当主の権利はミル、今の君にあるんだな？」

「う、うん。そうなるけど」

「それなら話は早い。資産家としてなら彼女に相手を選ばせるべきだ。少なくとも直系の男子がない以上、次期当主の考えを現当主が完全無視して良いはずがない。」

「何を言つておる! ミルフィリアは名のある家との婚約をだな……」

「…」

「何度も言わせないでください。親なら子供の幸せを願うべきです。それとも、自分の理想のために子供の未来を奪ういますか？」

「さすがにこいつ、頭堅すぎだろう。見てる分には面白いが、やられる側は大変気分が悪い。」

「いくら資産家といえど、この世界において政治のような駆け引きは皆無と言つて良いだろう。それに対して家にこだわる理由も、もう、随分昔に廃れたのだから。」

「貴様!! 私に向かつてなんて口を!! 私を誰だと思つておる!!!」

「レムクラン家当主ハーベルト・レムクラン。けれど、他の資産家当主には幾分劣っているみたいですね、柔軟な考えが出来なさすぎです。」

「こいつ、言わせておけば……」

「ちよつと、セラ!」

黙っていたミルが俺を黙らせようとするが、俺としてはここまでくだらないもの見せられて黙るつもりはない。

「そもそも、街中で魔獣が出たことに対して、情報の一つも掴んで

ないのでしょうか？」

「何を言っておるか！ 街中で魔獣などいるわけがない！！」

「他の二つの資産家である、セルレイ家とスノー家。どちらも街の外の襲来より中の方に注意しています。城壁内部での出現は危険に直結していることぐらい考えればすぐに気付くことです」

「その光景を見たような口を利くな。どうせ知ったかぶりであろう！！」

「その進言をしたのが僕だと言ったらどうします？」

「ハッ、そんな馬鹿なことを信じるとでも？ 貴様は誰だというのだ？」

「執事から聞いたのでしようが、あの人、名前まで通してないんですね。納得しました。改めて名乗らせていただきます、当主。僕の名は……セラ・グレイヴス」

「グレイヴス？ まさか、貴様、セルレイが言っていた、あの……」  
ミルが小さく驚いた仕草をしたのを視界の端で捉えた。さすがにこれ以上はまずい。

「それ以上は駄目ですよ？ ミルがいる。これはまだ彼女に話すべき段階じゃないはずですよ。」

「しかし、本人であるという証拠がないではないか」

「なんでしたらナースダムさんに連絡とりましょうか？ 個人的には居場所知られたくないのであまりしたくないですけど」

ナースダムさん、というのは資産家セルレイ家の当主のことだ。

あまり関わりたくないが、話が円滑になるならば仕方がない。

主に彼ではなく、その娘に多大な問題があるとだけ注釈しておく。「何を言っておるかさっぱり分からんが、他に何か無いのか？」

「……」番人”と”鍵”。こんなもので良いですか？」

「貴様、どこまで知っておる？」

「どこまでも。さて、話が大幅にずれましたが、元に戻しましょうか。彼女の婚約話は破棄、彼女に一任する。それに街中の魔獣監視強化をする、というのでいいですか？」

そう、脱線しすぎなのだ。俺の身分証明なんてどうでもいいだろう。後半の要求はもともと通すつもりだったのでこの際ついでに要求した次第だったりする。

「く……致し方あるまい。ミルフィリア、この一件はおまえの好きにしろ」

「本当ですか、お父様！　ありがとう、セラ！」

当主が折れ、ミルが椅子に座りながらも暴れんばかりの浮かれっぷりである。やれやれ、やっと面倒が済んだ。当主は苦虫を噛み潰した表情ではあるが。

俺が一息つくと、当主が鈴を鳴らし、先程のアートンという執事を呼び出してなにやら指示していた。ここまでくると、飯いらさないから早くここから出たいと思ってしまう。

「ところで、セラ・グレイヴス。君は何のためにここに来た？」

当主も落ち着いたようで口調が戻ったようだ。水に流すのだけは早いらしい。

「さっきの言葉の件で、独自調査にきました。本来ならばもう少ししてからこちらを伺うつもりでしたが、彼女に連れてこられてしまつて」

「それで、現状よりも魔獣が出てくるのか？」

「十中八九、まず何度も出てきますね」

「どうする気だ？」

「元を発見次第、殲滅します」

「対象は、いや、これは聞くまでもないか」

「ええ。知つての通りのことを遂行するだけです。ひとまず、僕に郊外に簡単に行き来できる権限をくだされば、明日からでも徹底的にやらせていただきますが？」

「……許可しよう」

やれやれ、本題の方がほとんど進んでいなかったが、これで何とかなるだろう。

タイミング良く、扉のノックされた音が聞こえた。



「お父様、リアルスです」

「うむ、入って良いぞ」

俺が見たのは、ミルよりも少し薄い蒼色、詰まるところ水色の髪と蒼い目の少女と、その傍らに立つ、茶髪ポニーテールのメイド少女だった。

## 第6話「資産家」(後書き)

お気に入り登録してくださった方々に感謝の意を。

「冗談どころではなく、本気でしてもらえとは思っていませんでした。」

次回の投稿は少し間を置かせていただきますが、短期間に数話までとめてあげる形にしたいと思います。話がぶれかねないので、しっかりとしたいとかなんとかか。もう遅いと言わないでくださいね？

(滝汗)

## 第7話「仮初めの日常」(前書き)

色々と前話の宣言が狂ったので、詳しくは後書き参照をお願いします。

## 第7話「仮初めの日常」

”なるほど、異母姉妹というわけか”

それが俺は部屋に入って来た人物を見て思ったことだ。

ミルの妹らしい少女はミルほど肌が白いわけではないが、どちらかと言えば健康的な色だといえる。動きやすさを考えたらしい髪型はショートカット、背はミルほど高くないが、低いと言うほどでもない。端正な顔立ちが、それを際立たせる衣装によってさらに明確にさせられている。

ただ、男として唯一残念といえば、あまり胸がないところである。俺個人はそこまで気にしない主義なのでどうこう言わないが、ミルが体目当てとか言っていたのはこの辺りなのかもしれない。それでも十分に可愛いとは思うけども。

「貴方が来客の方ですか？ 私はリアレス・レムクランといいます」  
彼女がこちらに気付कि、挨拶をしてきたのでこちらも挨拶をするために立ち上がる。

「初めまして、セラ・ヴレイヴスと申します。どうやら自己紹介したださるだけ、御当主よりもしつかりなさっているようですね」  
気付いていることだが、この当主、未だに俺に挨拶の一つもしていないのである。入って来ていきなり酷い扱いだったので俺もろくなことをしていない点については棚に上げておく。

その意味に気付いた当主はこちらにきつい視線を向けてくるが、例の通り、無視に徹して再び席に着く。

「お姉ちゃん、この人が？」

リアレスがミルの隣に座りつつ尋ねていた。

「ええ、そうよ。もつとも今説得中なのだけれど」

いい加減諦めないのか、ミル。俺は折れるつもりは一切無いぞ…  
…つと、ちよつと待て。

「既に俺を説得する理由はないだろう？」

よくよく考えれば説得の大義名分は先程無くなっている。にも関わらず俺を説得しようとは、どんな思考回路だ。

「せっかくだから、私に惚れさせてみようかなと。そしてポイントと捨てるのか」

「ボロ雑巾のようにして捨てるなよ!? そもそも、そんな理由で説得される人間などいるわけがないだろう!？」

予想以上のとんでも無く酷い思考回路だった。これ、本当にお嬢様の発想なのだろうか。人格を疑いたい。

「それならいつそのこと私と婚約してみませんか? 私はお姉ちゃんとは違って捨てませんよ?」

「半笑いで言われても全く信用できないので結構です」  
なんなんだ、この姉妹。人をからかい慣れてるとしか思えない。

「リア、セラは私が最初に目を付けたのだから私の物よ」  
「別にお姉ちゃんじゃなくても良いと思いますよ?」

「……婚約つてのはな、自分の好みで」この人と!」と思った人にするものだ。間違えても遊びでするものじゃないぞ」

この姉妹を放っておくとろくなことになるので釘を刺しておく。

「なんか、その言い方、まるで誰かと婚約したことがある言い方ね」  
「ミルがこちらを睨みつつ言ってくる。なんともまあ、鋭いことで」  
「気のせいだ。それより、俺は一体いつまでここにいれば良いんだ?」

詳しく聞かれても困るのでごまかしておく。当の本人は納得いかないようだが、俺としてはそんなことよりいつまで待たされるのかというのが問題だ。

「リアも来たんだし、そろそろ食事は来ると思うわ。セレス、そうよね?」

ミルはリアに付き添っていた、同年代と思わしきポニーテールのメイドに話掛ける。こう言う俺は極度の女好きに勘違いされるかもしれないが、実際にこのメイドもレムクラン姉妹に負けず劣らず

の容姿であると言える。メイド服の似合う少女、とえばいいのだろうか。

ふと思ったが、ここまで会った女性、片っ端から美少女揃いときた。資産家関係者の血筋には女性の美貌に関しての何かでもあるのだろうか。俺の思考がおかしいと言うより、ここまで揃っていると疑うと思うぞ、普通は。

「はい、もうそろそろ食事が出来上がるはずです。……あ、お待ちせいたしました。すぐに運びますね」

返答した直後に扉が開いて料理が届く。これ、毒とか入ってるんじゃないだろうか、俺のだけ。主に当主の嫌がらせで。だとしたら笑い話になるな。

いや、待て。冗談じゃなくて、これは……

「どうぞ」

俺はセレスと呼ばれたメイドから渡された料理を目の前にしてある種の疑問が湧く。対象が俺でなくとも、何かの料理に毒が入っているのではないだろうか、と。

それは勘だったか、こういうときの勘は信用すべきだと俺は考えている。そのため、俺はさりげなく、気付かれないようにある解毒系の魔法を全ての料理に無詠唱で掛ける。もし、解毒されれば反応がある魔法なのだが、俺に渡された食事のみごく僅かな量の反応があった。

対毒防止のためにこの魔法は使い慣れているので、術式は毒の種類、量までわかるように変更してある。結果的には、麻薬のような物ではなく、ただの睡眠薬のようなものらしかった。

さて、どこで仕込まれたのかを調べるか。俺のだけ、ということころで大方予想は付くけどな。

解毒をしっかりとした食事を何もなかったように食べながら、俺はどうするかを考え始めた。



とも良かろう」

「お父様!!! 彼は私が連れてきただけの存在ではないですか！それを捨てるなんて、酷すぎます!!!」

さすがに、ここで何もしないとすれば彼に顔を向けて話すことなど二度となくなる。それは、とてもじゃないが耐えられそうになかった。

「先程の話も撤回した方がよいかもな。これではレムクランの恥になりかねない」

「お父様、残念ですけど、たぶん恥なのはお父様のようですよ？リアがじつとセラの方を見つめてお父様に言う。」

「何を言っている？何が恥だというのだ？」

お父様は何も分かっていないようだった。私も全く訳が分からない。

「ねえ、セレス。貴方はどう思う？」

リアはかまわず続ける。

「はい、もしも彼が起きておられたら、恥どころではないと思います」

セレスが丁寧に返す。この二人は私よりこういうことには向いてるかもしれない。

「何を言っておる？こ奴は寝ておるのだろう？アートン、運び出せ!!!」

「お父様!!!」

反射的に私は叫んでいた。

アートンが渋々ながらもセラに触れる。いや、触れようとした瞬間だったと思う。

「……娘の忠告ぐらい、ちゃんと聞いておけば良かったな」

触れたと思った瞬間だった。セラはお父様の席の後ろまで行き、刀を抜いて首筋に当てていた。そんな、お父様の背後を取るなんて!?

「ば、馬鹿な。私ですら見えなかったぞ」



「舐めないでください。暗殺まがいのことをやるなら、笑って済ませられる程度の終わらせ方をすべきです。こんなのじゃ、ナースダムさんを超越することなんて出来ませんよ?」

小馬鹿にするように笑いながら、セラは刀を鞘に収める。

「次はないですよ。こういう世界において、失敗は死と同義で、誰にも例外なんてないんですから」

セラの言葉には重みがあった。それは、とても私と同一年で出せるものではなくて。

「貴様、何物だ?」

「セラ・グレイヴス、そう言ったはずです。推定年齢十五歳の特級学園に通うようになった、世界の理を知ってる人間、ってところですか。」

セラの口調はなんだか、自虐的な雰囲気を持っていた。なんでだろう?

「世界の理、か。では、セルレイの話は本当なのだな?」

「はい。そのためにここに来ました。俺は俺の役目を果たします」

「私の負けだな。知りたいのはここ最近のことなのだろう? 分かっている限りの資料を渡そう」

「では、ありがたく頂戴します」

セラは一礼して、部屋を出ていこうとする。

「今からどうするのだね?」

お父様はそんなセラに声を掛ける。

「用件が済んだみたいなので、宿屋に戻ろうかと。ついでに言えばこれのせいで住む場所が宿屋になりそうなので、そのために先立つものを稼ぐ必要があるんですよ。資料は宿屋に持ってきて頂ければありがたいです」

「その住む場所の件についてはこちらに責任があるのだったな……ふむ、いっそのことここに住むか? 正確には敷地内のある場所、となるが」

「どういった心境変化なんですか? ……っと、まさかと思えます

が、ブレグラルに住ませるおつもりで？」

ブレグラルと言うのはこの家の敷地の端に位置する家であって、人が一人住むには丁度良いどころか広すぎるくらいだ。けれど、ある理由で取り壊しもせず、かつ誰も住んでいない。

「ああ。そこまで知っているなら君も既知だと思うが、有事の際を除き、あそこの地下にある訓練場は我々で使う必要がほとんどない。だが、君には必要だと思うが？」

「まあ、確かに。あの訓練場は広すぎますしね。大抵は裏庭にある表向きの訓練場で十分でしょう。」

そう、ブレグラルは考えられないくらい大きな地下訓練場がある。そのための入り口が家の中にあって、かつ、家の中は所々罫があるためにうかつに使用人達に任せることも出来ない。一応、訓練場までの道は確保してはいるが、他はどうなっているのか見当も付かないのだ。しかも、壊そうにも、家そのものが何かで守られているようで壊せないという有様だったりする。

「そうだ。だが、外部に黙っているブレグラルのことを知っているあたり、本当に何者なのか気になるところだ。それで、どうする？」

「確かに、ブレグラルを使わせてもらうというのはありがたいですね。ここ最近ではろくな鍛錬が出来ていなかったから、願ったり叶ったりです。けれど、代価はやはり、あれですか？」

ブレグラルのことを知っているのは使用人の中でも信用できる者達ばかりだし、そもそも知っているも何も出来ない。あそこへ入るためには専用の鍵が必要だからだ。セラほどの実力者ならばあそこでもしかまともに全力を出せないだろうことは私でも分かった。

「そうだ、受けてくれるか？」

「さて、どうしましょうかね。確かに条件は良いんですけど、でもなあ……」

お父様とセラは交換条件の話に入っていた。けれど、セラは迷っているようだった。ちよっと、なんで私を見て悩むのよ!？」

「どうだ？ そんなに難しいことではないだろう？」

「条件が良すぎますからね、断りにくいですよ。とはいえ、背に腹を変えられないし、仕方ない、か。護衛の件、受けましょう。」

セラが渋々条件を口に出す。あれ？でも……

「護衛の件、つて何？」

「おい、ここに来るまで散々わめいていたの誰だよ？ あ、すいません、この条件の他に何かないですか？」

セラが馬鹿を見る目でこちらに言った後、お父様に条件変更を要求している。

「そうか、ミルフィリアが嫌だというならば仕方ないな。では、他の条件にするとしよう。」

お父様も残念そうに条件変更をしようとする。

「ちよつと待って！？ セラが護衛してくれるなんて条件なら断るわけないじゃない！！」

「そうか、ならば最初からそう言いなさい。では、頼んだぞ。」

「……ちっ」

お父様の発言の後にセラのわざとらしい舌打ちが聞こえた。そしてお父様はアートンに何かを言うと言つとさつさと出て行ってしまった。

「セラ、そんなに嫌なの？」

「面倒そうだからな。まあいい、ちなみに俺は表向きには最低ラインを突つ走るからそのことで一々突つかからないならば問題ないだろうね」

「あ、やっぱりさっきの実力は隠してるんですね」

リアが割って入ってきた。そう、隠さないなら実技重視型で入ってくるだろう。

「まあ、そうなりますかね？」

「お姉ちゃんに敬語使わないなら、私にもいいですよ、グレイヴスさん」

「……そうか。これでいいのか？」

セラが小さく笑う。

「はい」

対するリアは満面の笑みを浮かべていた。

「とはいえ、さっきのによく気付いたな？」

「それは簡単です。倒れ方がお姉ちゃん以外の角度だと不自然に見えるようでしたから。試していたのでしょう？」

「ああ、あちらがな。あの当主、わざと憎まれ役買つとは、役者だな」

「ちよつと、どういうことよ？」

私は意味が分からない。セレスも分かっているのに、なんか悔しい。「三文芝居に付き合っただけだ。あの当主、始めからきつかけ次第でこうすると考えていたんだろう。さっきの強引な手で俺も気付いた。所々甘い、さすがだ」

「ええ、私は元より聞いていたので驚きませんでした。でも、思つた以上の凄腕ですね」

「……そうでもない」

「またまた、謙遜しちゃって」

リアが楽しそうに喋っている。セラはと言うと、空気のように接している。私の時は嫌そうな顔するのに。こうなるとお父様のやったことなんてどうでもいい気がしてきた。

「なんか、私の時より微笑ましいのだけど？」

「なんか、いろいろする。何故か分からないけど、これは見てて気分が悪い。」

「そうか？」

「そうよ、なんで私の話は聞いてくれないのに、リアにはすんなり聞くのよ！？」

「そんなつもりはないんだが。それより、俺は今日ぐらい、帰って良いんだよな？」

「何言ってるの？ 護衛が護衛対象放つて良い訳ないじゃない」

「はつきり言うぞ、ブレグラルの掃除は今からやりたくない。すぐ終わらせるなら人手もいるし。それに、俺はまだ宿に荷物を置きっぱなしなんだ」

「なら、宿の荷物持ってきてここに泊まればいいじゃない」

「うわ、すごい良いこと言ったみたいだな顔してるな、ミルは。……わかった、今から行ってすぐ戻る。大した量もないからすぐだろ」

「そうしてくれる？ なんならついて行こうか？」

「護衛対象が嬉々として危険に足を踏み入れようとするとき、俺はどうしたら良いんだろうな？」

頭が痛そうな表情をするセラ。あれ、私そこまで危機感ないかな？

「うーん、セラが居るから安心だと思ったんだけどな」

「すぐに戻るからここにいろ。ったく、外野は面白そうにこっち見てくるし、なんだよ、これ。俺の扱いは毎度こんなものなのか？」

セラがわざとらしい独り言をいいながら、扉から出て行く。アーンは見送るためか、それについて行く。

それを見つめた後、不意に独り言が出てきた。

「はあ、なんだかなあ……」

「お姉ちゃん、あの人に惚れたの？」

黙っていたリアが突然私に話を振ってきた。

「何言ってるの？ 私がセラに惚れる？ そんなはずが……」

確かに、考えてみれば、女の子の憧れ『白馬の王子様』のようなことをやってのけたセラに対して私がそういう気持ちを抱く可能性はある。けど、まだそこまで決定打になっていないはずなのに。

「ふふーん、赤くなってるね。姉さん、凶星かな？」

「そ、そんなわけないじゃない！！」

リアに指摘されて気付いたけれど、無意識に赤くなってしまったのだろうか？ おかしい。そこまでセラの事を意識しているはずがないのに。

「ミルさん、自分に正直になった方がお得ですよ？」

セラすまでも私に問い詰めてくる。もう、なんなのよ！？

「私はずっと正直よ！？」

「はいはい。それで、ヴレイヴスさんの馴れ初めはなんなの？」

「ちよっと、リア！？」

「ミルさん、どんな出会いをしたら一日で恋に落ちるか私も知りた  
いんですけど?」

セレスまでもが目を輝かせて聞いてくる。この子達も年相応に乙  
女、ということなのだろうか。

「って、ちよっと! 私はセラにそんな気持ちは……」

「大丈夫!! 私は応援するから!!」

「私も、そうですね。」

「話を聞いて!!」

こうして、私はセラが帰って来るまで妹とその侍女に攻められる  
羽目になったのだった。

……あれ? 私、セラがここにいて当然、って思ってしまったる  
? 気のせいよね、うん。

## 第7話「仮初めの日常」（後書き）

なんというか、やっつけてしまいました。

話が延びるほど、その前後のあたりで矛盾が出てくる出てくる、そんな状態になってしまいました。要は、設定をしっかりと考えておけという典型的な例になってしまいましたとさ。

それで、何が起きたかと言えば、連続投稿で一気に片付ける作戦はしばらく先になりそう、ということ。実は現時点で11話まで誤字脱字のチェックしたらすぐに掲載できる状態とも言えるのですが、話を長くすることで起こる矛盾を無くすためにはもう少し時間がかかりそうです。

終わり次第、投稿しますが、連続投稿が出来なくとも、ゆったりペースで連載していくことになると思います。楽しみにされていた方、ごめんなさい。

そんなわけで、タグに”不定期更新”を追加しておこうかな、とか思った時雨です。

## 第8話「流れゆくは平穩」(前書き)

更新が非常に、あり得ないくらいに遅いですが、作者が時間を割けていないだけです。でも5ヶ月はなかつたなあ……orz





ふと思って、辺りの気配を探ってみる。明らかに、こちらを観察している張本人達の気配があった。この状況だから慌てすぎて最初にそこまで勘ぐってなかった。

「せら〜」

「おい、いい加減ちゃんと起きろ、そして現状を把握しろっ!!」  
俺の叫びは当事者以外誰にも届かなかった。そして、それが良かったのか悪かったのか、その後のこともその他には知られずに済んだことになる。

\*\*\*

「私、なんであんなこと……」

「ミルはそんなこと考えなくていい。どちらかと言えば、その二人が問題なんだ」

俺達は朝を食堂で適当に取る。使用人達も混ぜて適当に取るのがいつものことらしく、俺はミルとリアレス、セレスティアと一緒に朝食を食べていた。

「だってさ、半分寝てるお姉ちゃんを連れて行ったらどうなるかな、って思ってる」

「そうですね、昨日も言いましたがミルさんには積極性が足りません」  
リアレス、セレスティアが口々に言う。ちなみに、セレスティアは昨日のポニーテールのメイドである。本名セレスティア・デイヴィス。名前で呼んでいるのは同じ名字の使用人がいるからだ。密かに家族ぐるみなのかとしみじみ思ったりもした。年齢はリアレスと同じく十四だとか。にしても、こうしてみると、三人とも姉妹に見えるくらい仲が良い。全員容姿いいからなおのこと。

「セラにあんなこと……なんで、あんなことしちゃったかな」

ミルはと言えば明らかに落ち込んでいた。仕方ないと言えば仕方ないだろう。

「好きでもない男にあんな羞恥心もないような事したらショックだ

るうな。でも、学園でそんな顔していたら慰めようとする男が絶えなくなるから、それはそれでまずいんじゃないのか？」

「セラ、その事実をはっきり言わないで……」

ミルの事情は昨日で大体分かっていた。どうやら婚約候補者が正式な婚約をする方法は接吻、つまりはキスしたらいいわけで、ミルが狙われているというのはその類で誘拐されたりすることを恐れていたらしい。無論、襲うとかでは意味はなく、自発的にやることでマーキングのようなものが出来るらしい。魔獣に襲われた際に武器も持たずにいたのは、そこそこ魔法を使えるため、街中では大丈夫と思っていたらしい。さすがに、魔獣に襲われたのはその線ではなく、ただの偶然だと俺は思うけどな。

「うーん、でも、グレイヴスさんはもう姉さんと婚約できちゃうんですよね」

「すまないが、俺はその事実には目を瞑りたい」

「でも、もう目撃者もいることですし」

そう、察してくれた人は正しい。実は俺、寝ぼけたミルにキスされてしまったのだ。役得かもしれないが、頭が痛くなる。

ちなみに目撃者はこの二人。仕掛けたのも、この二人。なんといつか、嵌められたということだ。

「リア、セレス。お願い、その事実は秘密にしてて」

「「えー」」

「まあ、犬に噛まれたことにでもしておけ。俺は婚約なんてものに興味ないし、ミルの意志を潰すようなことはしない。学園で悪い虫を駆除するなんて役目は請け負っていないからな」

「セラは、セラは私に興味がないの!？」

「いやまで、何故怒る? ここはほっとするべきじゃないのか?」

「いや、そういう意味じゃなくて。俺は別に婚約にこだわる気が無いって言っているんだ。ミルが可愛いのは否定しないし、あれはある意味至福でもあるが、それとこれとは話が別だ」

「セラは、変態ね……」

「なあ、怒っていいか？ どう反応しても俺が悪者になっているぞ」  
「なんともまあ、微笑ましい朝だな、うん。現実逃避がしたくなってきたのは秘密だ。」

「はてさて、グレイヴスさんはお姉ちゃんのことどう思っているのですかね？」

リアレスが話題を振ってくる、かと思ったが、明らかにループしそうな予感がしてきた。

「クラスメイトで資産家、かつ俺の護衛対象である超絶美少女」

「やけにあっさり言いますね」

セレスティアは呆れていた。とはいえ、事実なのだから仕方ないだろう。

「でもでも、昨日魔獣の群れからお姉ちゃんを助けたわけですよ？ なんとも思っでないのに」

「死なれたら夢見悪くなるだろう、たぶん。それに救える命は救うべきだと思ってるよ、俺は」

「セラはやっぱり、卑怯」

「ミルが拗ねていた。だから、なんでだ？」

「でも、その助け方って、純粋な乙女を墮とすためのやり方とかそんなのだったりします？」

「いやまて、誰が好き好んでわざわざ何度も資産家を魔獣から守るなんてことやるんだよ？ 俺はリリイ達の時と同じようにしただけだ」

そう、何度も資産家を狙って助ける気なんてない。偶然の産物でしかない。それに、俺は同じことをしたリリイには追いかけるだけの立場だ。だからミルに恋心なんて出来ているとは到底思えない。

「……リリイ？」

三人ともハモっていた。いや、そこまで驚くことか？ 確かに、事実だけなら驚くべきところだが。

「ああ。三年くらい前に魔獣に襲われたセルレイ家を助けたときと

同じだったってだけだ。誰か、まで言わなくて良いだろ?」

「ちよつと、セラってあのリリイと知り合いなわけ?」

ミルの雰囲気には少しばかり怒気がはらまれているような気がする。

「ああ、二年ほどセルレイ家に世話になったからな。毎日追いかけて回されたから大変だった」

そうだ、本当に二年間追いかけられた記憶しかない。理由など見当もつかない。そしてなぜ怒っているのかも分からない。

「むむ、これはお姉ちゃんに強敵がいるかもしれないね」

「ミルさん、急がないと大変ですよ?」

何か二人が意味の分からないことを言っている。なんなんだ、こいつらは?」

「だから、違っつてば!」

朝食を食べ終えたミルが顔を赤くして否定した。

「それだけ元気があれば、もう大丈夫だな」

俺はと言えば、食べ終えた食器を片付けるため、立ち上がって、ついでにミルの頭をなでていた。

「!?!」

ミルは声にならない声を上げていた。

「元気が出たなら、さっさと用意して学園行くぞ。別々が良いなら先に行くが、どうする?」

「一緒に行くに決まってるじゃない!!」

すぐく力強く肯定された。俺が頭をなでた女性って大概みんなこうなるから不思議だよな。ま、元気になってくれたからいいか。

「それじゃ、用意が出来たら玄関で」

そして、俺は一足先に客室へ戻り、学園へ行く準備をした。

「<<ミルフィリア side>>

「グレイヴスさん、大胆ですね」

セラがいなくなってから最初に言ったのはセレスだった。

「うん、ここまで凄いとっては思ってたよ」

リアもそれに同意していた。

「……セラはきつと、そんな目で見てないわ」

私は確信していた。きつと、セラはそんなつもりが一切ないということを。でも、あのセラは魔獣から守ってくれた時みたいに優しくかった。

「なら、どうするの、お姉ちゃん？」

ほしいものを手に入れる努力をする。今までの私でもっともほしいもの。それは何かと考えていた。

「ミルさんはきつと、わかっていていると思いますよ？」

私は、セラをどう思っているのだろうか？ たった一日で、寝ぼけていたとはいえ、キスをしてしまった私。どうして、そんなことをしたのか考えるまでもなかったのかもしれない。

「……二人の言う通り、私、セラが好きなのかもしれないわ」

ここまでくると、惚れてしまったとしか考えられなかった。悔しいけれど、事実なのだ。

「だから、そう言ってるじゃない」

「では、どうされるのですか？」

「セラに私を好きになってもらう！」

そう、せつかくなら両思いの方が良いに決まっている。そこに迷う余地はない。

「がんばって、お姉ちゃん！」

「応援しますね」

二人から後押しをもらい、私は食器を片付け、セラと一緒に学園に行くために、用意を取りに行った。

\*\*\*

玄関には、腕を組んで待っているセラが居た。

「来たか、それじゃ、行くぞ」

セラは私が見ると、玄関から出て行く。

「ちよつと、待ってよ、セラ！」

私は慌ててそれに続く。

学園、と言われてまず考えることはやはり、制服なのではないだろうか？ そう、戦闘を考慮した制服というものが昨日の夜、自宅に届けられるのだ。もっとも、セラに関してはその事実を知らず、かつ自宅の登録は出来なかったため、こちらが届けるといふ形を取った。これは最低限の罪滅ぼしだったという理由もある。

セラと私はその新品の制服に袖を通し、学園へと向かう。なんか、セラに関しては昨日の私服と似たような格好な気もしなくもないけど、似合ってるからいいかな。

話は変わるけれど、私の家はこの街のもっとも高いところにある。それは同時に学園までの道は下り坂ということ。とはいえ、そんなことはどうでもよくて、重要なのは資産家の家までわざわざ来る人間はそうはいないことが重要。つまり、ある程度まではセラと私は二人だけと言うことになる。よく考えれば、チャンスではないだろうか？

「あの、セラ、学園での生活のことなんだけどね、その……」

うまく言い出せない。こつ、自覚してしまったことで、はつきりと言えなくなってしまった。ただ「学園で一緒にいたい」って言うだけなのに。

「念のため言っておくが、俺の護衛は影からひっそりとやるから、堂々とかまいに来るなよ？」

「え、なんで？」

けれど、その言葉を絞り出す前に否定の言葉をもらってしまった。「何度も言うが、俺は大っぴらに実力を出す気なんて無い。だから

だよ。護衛なんてやっていると思われる、無駄にややこしくなるだけだろ」

「うん、うん……」

「だから、学園では基本的に一人で行動してもらおう。当然だが、門に入る前には別々で入ることになる」

「……そうね」

「昼は言った通り、俺は図書館に行く。っと、その前に昼を取らないといけないか。たぶん屋上でひっそりと取る」

「……うん」

正直、落ち込む。せっかく一緒にいられるチャンスなのに、こうも拒絶されてしまっただけではショックでしかない。でも、セラにはセラの事情があることは分かっている。ので何とも言えない。そのことが悔しかった。

「ただ、友人としてなら拒否しない」

「うん。……って、え？」

なにか、セラから意外な言葉が聞こえた。

「一応、クラスメイトだろ？ 昨日の呼び出しも見られてしまったなら、多少喋るくらい問題ないはずだ。資産家じゃなく、一人の友人としてなら話し相手になろう」

「本当に？」

「嘘ついてどうする？ 大体、こんな可愛いミルに対して話さない男はたぶん、いないだろう」

「本当に友人としてならいいのね？」

「だからといって、常にいられると噂が立つからほどほどにしとけよ。本命探したいんだろ？」

「……セラがいるならいいもん」

私は小さく、聞こえ無いくらい小さく呟く。

「なんか言っただか？」

聞こえたのだろうか？ セラが嫌そうな顔でこちらを見てくる。

別に悪口じゃないってば！！



「うづん、何にも。」

「ならいいけど。俺の悪口を噂にするのは勘弁してくれよ」  
「やっぱり、悪口と勘違いしていた。」

「そんなのやらないわよ」

そう、セラが私を見にくれるためにそんなことをしても損するだけだ。だからそんなことはしない。

「そうかい。それじゃ、さっさと学園に行こうか。俺は行き道で会った友人Aという扱いで」

「セラはセラでいいじゃない!!」

セラは冗談半分に言っているが、絶対に半分は本気だ。どこまでも自分を下げていきそうな勢いでもある。

とにかく、そんな会話をしながら学園へと向かっていた。

## 第9話「学園は常に波瀾万丈」

「ねえ、セラ」

「なんだ？」

「友達つていいね」

「まあ、そうだな」

「それより、この視線って……」

「間違いなく、俺と普通に喋っていることが原因だと思うぞ」

「なんで私とセラが喋ったらこうなるの？」

「肩書きが重要だ。というか、既にミルの人気が高いみたいなんだが？」

「そんなことないわよ」

「そんなことがあるから、こうして見られてるのだと思うぞ」

「そうなのかな？」

現在、最初の休み時間。武器やら何やら持ち込んでいた皆は現在、拳サイズの道具『アレイ』と言われる学園専用持ち運び装置によって非常に身軽になっていた。

この『アレイ』という装置は学園内でのみ物質の収納が簡単に行えるシステムなのだ。原理は非常に難易度の高いとされる転移魔法を魔法陣で利用ものである。転移魔法は何の準備なしでは転移距離に比例して基本からして多い魔力消費が増えていく上、転移対象が物体ならば難易度が少し下がる。これを逆転の発想で学園内でのみ物体の転移が出来るようにしたものののだ。とは言っても、各自のロッカーに転送出来るだけなので、別空間に入れるとかそういうものではないと言っておく。簡単に言えば、学園に敷かれた魔法陣によって稼働する端末、ということなのだ。さらに欠点があり、学園用に簡略化した結果、学園内のみでしか使えず、かつ、転移に使う魔力は自己負担である。つまり、転送しにくいものほど魔力が必要となるため、才能などがなく、実技で武器頼みの生徒はこのシステ

ムを利用しにくいとも言える。

話が脱線してしまった。とにかく、私はセラと喋っていたら、現在周りの男子の視線が全員私達に向かっている形になる。どちらかといえば、セラだと思っただけれど。

「とりあえず逃げよう。今決めた。俺、昼休みは絶対にここから逃げる」

「どこに行くのよ?」

「ここで言ったら、追いかけれかねないから言わない」

「私は言わなくても追いかけるわよ?」

この瞬間、クラスでどよめきが起こった。何か変なこと言ったかな?

そんなことを考えたらセラに頭を軽くはたかれた。

「その言葉は誤解を招くからやめる。ただの友人なのに、まるで恋人みたいじゃないか」

「こ、恋人って……」

セラと私が恋人……うん、間違われてもいいわ。むしろ事実にしてしまつて良い!

「あのー、ミルさん? 大丈夫ですか、おーい」

セラが馬鹿にしたような敬語を使つても気にしない。良い夢よね

「セラと恋人……いいなあ」

「!?!」

セラがびくつと震える。私……しまった、つい本音が出てしまつてる!?! どうしよう、どうしよう!?!

「おい、グレイヴス。ちょっと外、出ようか?」

近くの男子がセラの肩に手を置き、外を指す。なぜか既に男子全員が臨戦態勢だった。

「……ミル、命の危険が出てくるから、ここだからかつのは今後やめてくれ。これはやり過ぎだ」

セラがやれやれという感じで席を立ち、男子に付いていく。

「あ、あれ？ やり過ぎた、のかな？」

私は若干勘違いされたことについてシヨックを受けていた。が、そんなことは一瞬だった。

そう、セラが教室を出てすぐに爆音が出たからである。まず間違はなく、この爆発音は魔法の類である。

「男子、すさまじいね」

「うん、まあ、既にアイドルと化している人を独占してたらこうなるでしょ」

「実際のところ弱そうなのに目立つことするからこうなるんじゃないの？」

「あ、それ言える」

残された女子から口々に散々な評価を出されているセラ。なんか嫌だなあ……

でも、よく考えれば、昨日のあの一件がないと私もこうなっていたのかもしれない。そう考えると、セラがわざとやっている可能性すらあると思う。

「おい、逃げたぞ！！ 追え！！ 地の果てまでも追いかけて叩き潰すぞ！！」

「合点承知！！」

「天誅をあいっに！！」

口々に叫びながらセラが逃げたらしい方向へ走って行く男子達。

その動きで土煙が舞ってるようにすら錯覚してしまう。そもそも、セラ、逃げるとはまた古典的ね……ある意味仕方ないのかもしれない。

「うわー、あれはすごいね」

「うん、すごい」

残った女子の反応はもつともだと私だっと思う。まさかあそこまで男子がやるとは思ってもしなかった。だからこそ、セラが逃げ出すのも分かってしまうのだ。

そう思っていたら、始業のチャイムが鳴っていた。利口な男子が

一人戻ってきたみたいだけどこれはどうにも男子ほぼ全員遅刻扱いになりそうね。セラも、残念だけど……って、今、教室に入ってきたのって!!

「あー、なんなんだ、ったく。時間考えてやれと言いたいな」

逃げたはずのセラが戻って来ていた。ちよつと、いつの間に!?

「……なぜだか視線で痛い気がしてきた。俺が何をしたと?」

セラは頭が痛そうにこめかみに手を当て始めていた。

「ちよつと、セラ!! どうやったの!?!」

そんなセラをそっちのけで私は方法を説明してもらおうべく、他の女子を差し置いてセラに詰め寄る。だって、他の女子がちやつかりセラに近づこうとしていたから、つい、ね。

「……ああ、そういうことか。説明するから、慌てるな。簡単に言えば、身代わりだ」

私の一言にセラが納得できる解を得たようにして、説明してくれる。むしろ、普通にアレを振り切ってきたら注目するでしょうに。ただ、その方法がよく分からなかったなので、私はそれを聞くことにした。

「身代わり?」

「そう、身代わり。これで代用した、な」

そう言って、セラは一枚の札を出してくる。

「札? それでどうやって……」

「幻術つてものが魔法であるだろ? それを符術で使用した。とはいえ、場合によっては知覚を奪うことで完全に再現できるように思わせてしまう幻術に比べ、あくまで真似事だから、そんなに高性能じゃない。だから端から見ても実体はないし、持って五分だろうけど、あいつら血が上ってたから、これぐらいで間違えてくれるわけだ」

「それって大変なことじゃないの?」

「当然、これ一枚作るだけでかなり時間かかる。とはいえ、何となく必要そうだと思うって、持ってきておいて正解だったな」

「ちょっと、いいの？ そんなもの使って？」

「良いも悪いもないだろ。ミルと俺が普通に話すだけで嫉妬され続けることは間違いないし、採算度外視しておかないと命が危ない」  
セラは苦笑いしながら席に戻って行く。

「ほら、ミルもさっさと席に戻る。身代わりを追いかけていった男子には悪いけど、授業の遅刻者には罰があるらしいから、大変だな」  
「……うん、そうだね」

私は、少し戻るのを迷っていたけれど、先生が教室に入ってきたため、少しだけ慌てて席に着いた。

ちなみに、セラを追いかけて行った男子全員は授業半ばで諦めて帰ってきた。ただ、その処罰は、幻術に対する対処法についての考察をするという、ユーモアに富んだ処罰だったとだけ追記する。

\*\*\*

そして、昼休みどころか、放課後。移動教室での本日最後の授業の後、それは起こった。

昼休みにはセラが追い回されて、私もセラと一緒に走っていた以外に特に何もなかったのだ。もともと、それが別段何もなかったと言っただけなのかは分からないけれど。

ひとまず、ラブレターっぽいのが目の前にある。恒例の下駄箱ではなく、下駄箱がないので机の上に置いてある一通の手紙。

『ミルフィリア・レムクラン様へ』

この短期間でラブレターというのはどうだろうか？

色々と思うところはあるけれど、ひとまず中に目を通す。そして、思ったことは簡単だった。

「なにこのラブレター？」

書いてあることは基本通りのラブレターである。それだけに、恒例パターンの校舎裏に来てほしいというもの。

セラに聞いてみようかな、などと考えて、セラの方に目をやると、セラは近くの女子と楽しそうに話している。

そう、セラは一応知識重視型で入学しているだけに、知識型授業では間違いなく主席レベルなのだった。今日の授業を通して、そこだけは隠す気が無いらしかった。つまり、授業の演習なんて簡単なことと言わんばかりに瞬間的にこなしてしまう。そして、空き時間には、わざとらしく渡されたばかりの教科書を広げてそこにメモ書きを加えていた。それもものすごいスピードで。その行動に気になった教師は、そのメモを見た後に授業に来なくていいとまで言う始末なのだった。実際のところは何しに学園に来ているのかすごく気になるけども、それよりも頭が良い、ということが大きなポイントなのだ。加えて、男子との鬼ごっこに対してまだ二度しかやっていないとはいえ、逃げきったという実績があるため、女子の中では株が急上昇。私という者がありながら、この態度はどうかと思う。確かに付き合ってはいいけど、一応、事故とはいえ、口づけした仲なのに……

「どうした、ミル？」

苛立っていたら、セラが目の前に来ていた。いけない、いけない、何事も無かったようにしないと。

「な、なんでもないわ。そう、何でもないの」

「……誤魔化すのが下手だな。何か呼び出しされたんだろ、行くか行かないかは自由にしろ、俺はその意志を尊重する」

セラの反応は淡泊なものだった。何よ、もう少し反応合ったって良いじゃない！ 本当に私に興味ないのかな……そうだ、これに行くって行ったらどんな反応するのかな。

「いいわ、行くわよ、言っただけじゃいい。一人で行くから、気にしなくていいからね」

「そうか。なら行ってこい。気に入る人だと良いな」

そういうセラはさっさと教室を出てしまう。

「あ、ちょっと……」

少しだけ戸惑った後、そう言った時にはもうその場にセラはいなかった。

もしかしたらそのまま待たずに家に帰ってしまっかもしれない。一緒に帰ることも出来ないと考えると少し胸が痛くなった。

でも、セラが私のこと振り向かないから悪いのよね、うん、そうに違いないわ。だからセラを後で困らせてあげるんだから、覚悟してもらわないと！

その開き直った考えが間違이었다と知るのは、すぐ後のことだった。

\*\*\*

「えっと、場所間違えたのかしら？」

ラブレター指定の場所には数十名の学生がいた。私が来た瞬間、取り囲むようにして陣取る。

「ああ、合ってるよ。さて、どうする？」

今日は特に実技もなかったので相変わらずまともな武器など持ってきていないし、この人数相手には、私一人では多勢に無勢でしかないのもまた事実。

「どうするって、何を？　そういえば貴方、見た覚えがあるわね。悪いけど、私は貴方と婚約なんてする気はないからね。」

そう、リーダーと思われる男は私より二歳ぐらい年上の婚約者候補だった気がする。一々覚えてはいけないけれど。

「それがね、君がそれを認めてくれるようにこの人数を集めたんだ。君が許可しなかったら回して楽しもうかと思って」

「……貴方、下品ね」

「結構、結構。その顔を快樂漬けに堕とすのも楽しそうだ。覚えとけ、俺の名前はカーツ・ベルグラウンドだ」

「ごめんなさい、私は興味ない人の名前を覚える気もないの。それに、そんなに私は安くないわよ？」



少し身を引きなから私は答える。そう、こんなところで純潔を失ってたまるもんですか。もう、私は誰が好きになったのかわかっているのだから。セラに初めてを捧げてしまうところか、全てを晒したっていい。それぐらい、何故か惹かれていられるのも事実なのだ。

「そうかい、それじゃ、やっていいよ」

男の一言で周囲の男達が同時に襲って来ていた。けど、これくらいなら。

「ファイアボール  
《火炎球》」

私は詠唱破棄の魔法を名も知らない取り巻きの男達に一気に叩き付ける。正直、これぐらいなら私でもなんとかなる。だが、それは自惚れであったことを気付かされた。

「かかったな？」

「何を言ってる……きゃ！？ 《障壁》！！」

《反射》<sup>リフレクト</sup>何かで反射された私自身の魔法が私に向かってきたのだ。とつさに、《障壁》<sup>シールド</sup>を展開したことで、ダメージそのものはなかったけれど、これが致命的になってしまふ原因になった。

「予想通りだ。《拘束》<sup>バインド</sup>」

「っ、そんなんっ！」

《拘束》<sup>バインド</sup>は相手がその場に居続けなければ当たることがない使にくい魔法。だから普通は相手が動けなくなってから使う。だから、こんな順を立てられた。

「《障壁》<sup>シールド</sup>が発生している場所は移動もままならないからね。こうもうまくいくとは思わなかったよ」

防御しないといけない、けれどそれも相手の予想の内。こうも簡単にやられてしまったことに私は二の句が継げなかった。《障壁》<sup>シールド</sup>の解除が間に合わなかったのも事実だが、私の自信が無くなっているのもある。

「さて、それじゃ、ご開帳といきますか！」

ニヤニヤしながら奴らはやってきた。こんなの、こんなのってないよ……

「嫌、嫌よ。助けてよ、セラ……」

私はそんな声を出すしかできなかった。セラが来てくれるはずがないのに。

「は、誰に助け求めているんだ？ ま、無駄だがな。一人でどうにかなる俺たちじゃない」

だが、こんな絶望を前に雰囲気こそぐわなない声が聞こえた。

「獲物の前に舌なめずり、三流だな。三流はそれらしく散る運命らしいぞ？」

諦めたこともあって、ふいに聞こえたその声のした方を見れば、セラがいた。

「セラ！！」

「まったく、もう少し自分の危機を理解しろよ？ 護衛頼んだ意味なくなるだろ？」

セラが余裕と言わんばかりの雰囲気を出しながら、私に向かって歩いてくる。そういえば、周りが全員動けなくなっているようだ。そして、私の隣に立った後にセラが私に掛けられた《拘束<sup>バインド</sup>》を解除してくれた。どうやってたらそんなことが出来るのか分からないけれど、簡単にやってのけた。

「な、なんだ、一体何がどうなっている？」

「彼女を中心に半径二十メートル、敵性のある者の行動を物理、魔法両側面で拘束させてもらったんだ」

「……そんなことが、おまえに出来るわけがないだろう」

「普通にやったら出来ないな。だが生憎、俺には陣を作る時間があった。知識だけはあるから、時間さえあれば陣を構築することは出来るんだ」

頭を指さして説明するセラを見て私は納得した。だからセラはさつさと教室から出て行ったんだ。畏を張るために、このためだけに「おまえ、これで勝ったつもりか？」

「まだ勝ってはいないさ。いや、これで終わりかな。担当者が来たらしい」

セラが後ろに親指を向けると、先生達が来ていた。

「貴様ら、学園内で資産家に手を出そうとした件で引つ張らせてもらう。そうでなくともこれは重大な犯罪行為だ。覚悟を決めるんだな!!」

言つと、先生達は丁寧生徒達を一人ずつ拘束し、連れて行く。いつから見ていたのか、でも、これで終わりそうなので一安心した私が出た。

「な、馬鹿な。こんなに早く、来るなんて、そんな馬鹿な!!」

などと、リーダーは喚いていたが、後の祭りだろう。少なくとも彼はこれで人生は終わったも同然だということだけは確かだった。それほどまでに学園の処分は厳しい。

「ご苦労、グレイヴス。しかし、よくこんな術式知っていたな?」

「昔、本で見たことがあるんです。なんとなく躍起になって覚えたものがここで役立つとは思いませんでしたけどね」

「そうか。だが、これは誇って良いだろう。グレイヴス、実技の点数にはいくらがおまけしておこう」

「ありがとうございます」

先生はその言葉を最後にすぐに去ってしまった。

「……あの、セラ、ありがとう」

「ふざけるな」

セラが怒気を露わにした声で言ってきた。こちらに近づいてくる。

「一応、歯、食いしばれ。もしくは、少し我慢しろ」

「え?」

呆けた瞬間だった。乾いた音と同時に左頬に衝撃が来たのが分かる。すごく、痛かった。セラがはたいたのだろう。

「何故準備もしなくて一人で行こうと思った。一人で出来ないならば意地を張るな。自分が不幸になった時、誰かが悲しむ可能性を考  
えろ」

「私は、ただ……」

ただ、セラに気にしてほしかっただけなのに。

「ただ、じゃない。恋文見て、はしゃぐなどは言わない。君が幸せになるチャンスでもあるのだから。だが、君に何かあってみる。悲しむ人がいるはずだ」

「私は……」

きつとリアとセレスは悲しむだろうけど、それでも、セラに気にしてほしかった。嫉妬してほしいとすら思ってしまう。つまらない意地でも、そう思ってしまった。

「俺は君の友人だ。だから言おう。つまらない意地と、明日を秤に掛けるな。君の幸せが他の人の幸せに繋がっていると言うことはその逆もあるんだ」

私は何も言えない。本当につまらない意地で、セラがいなければ何かあったと言って間違いなかったのだから。

「近くにいた先生達に感謝するんだな。おかげでさっきの陣が作れた。そうでなければビンター一回じゃ済まさなかった」

「どういう、こと？」

「こんなことで本気出すわけにはいかないんだよ。だから、もっと仕事が増えてた可能性があるわけだ。最善策で済んだだけ、これで終わりにするが、反省しなかったら次はこんなものじゃ済ませない」  
でも、セラの本当の気持ちってなんだろう？ なにか、私のために怒っている訳じゃない気がしてくる。どちらかというと、自分自身に怒っている、そんな気すらした。

「ねえ、一つ、聞いて良い？」

「なんだ？」

「セラは、私が不幸になったらどう思う？ 悲しむの？」

「言わないとわからないか？」

「……そうよね、セラはやっぱり、他人なんだもんね。悲しむわけないよね」

「そんなに、もっとビンタ食らいたいのか？」

「だって、わたしは！」

「あのな、友人が辛くて嬉しい人なんていない。少なくとも、それ

は友人じゃないんだ」

セラがまだ軽く痛む左頬に手を当ててくる。そして、また、あの優しい顔を見せてくれた。

「その痛みは今回の俺の心配した分だと思って受け取れ。もっとも、痛みは体じゃなくて、心に刻まれたからもう十分だろう」

セラが《回復》<sup>リカバ</sup>でも使ったのだろうか、痛みが一瞬で引いたのがわかった。

「セラ、私は、その」

「俺を困らせるなら、もう少し別の事で困らせてくれ。こっぴつのは面倒だ」

セラはそう言って立ち上がる。その雰囲気には、もう怒っている様子はなかった。

「もし、困らせるならどういふことがいいの？」

「できたら困りたくはない。だけど、弱さを人に見せることが悪いとは言わない。素直になることが悪いことじゃないから」

「なら、私、正直になってもいいのよね？」

「いきなり何言ってるんだ？ 正直になるのは良いけど、目の色変えるのはなんか違うと思うぞ」

セラがやれやれと手を上げる。もう、なんか後先考えたくなくなつた。もう、ここでセラを離さないことにしよう。

「セラ、ごめん。これが私の正直な気持ちだから、受け取って」

「おい、何言つて」

私はセラに飛びかかり、セラにキスをした。

「やっぱり駄目。セラ、離さないから」

「……本気か？」

「本気よ。セラは私の騎士<sup>ナイト</sup>で王子<sup>プリンス</sup>なんだから」

そう、よく考えれば、はじめからこうしておけば良かったのだ。そうすれば、セラだって、なんらかの反応が返ってくるのだから。

「少し物事考えてから行動しような。とはいえ、返答するならば、俺はまだミルに惚れた訳じゃない。せいせい、俺を惚れさせてみる」

軽いため息をついてセラは私を離して、歩きだす。これは、手強いわ。でも、諦めないから。

「セラ、ちよつと待つてよ!!」

私はセラの腕に自分の腕を絡めるようにする。

「待たない。俺は調べ物が一切出来てないんだ。今からでも俺は図書館に行きたい」

「それじゃ私も行く」

「やめろ、つて言っても聞かないだろうから、勝手にしろ」

セラの口調は呆れながらも少し、なぜか照れ隠しのような感じでした。なぜなら、私の腕を引き離す気が感じられなかったから。

「うん」

私はセラの腕に絡んだまま、至福の時間を味わっていた。

この後、時間ぎりぎりまで図書館でセラは調べ物をして、帰った後に二人にこのことの報告をしたりした。

覚悟しててよ、セラ。絶対振り向かせてみせるから!!

第9話「学園は常に波瀾万丈」（後書き）

時間が足りません。正直、ありませんorz

とか言いつつ、割と長くなってしまいました。（この時点では最長）  
文字数としてはどのくらいで一区切りつくのでしょぅね……？（滝  
汗

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5096q/>

---

Proving Ground ~ 喪失と融合の世界 ~

2011年8月26日03時24分発行